

姫路市立美術館
研究紀要
第19号 ■ 2020年

改訂版

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

姫路市立美術館
研究紀要
第19号・2020年 改訂版

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

目次

序

不動 美里(姫路市立美術館 副館長兼学芸課長)

1

<特別寄稿>

失われた松方コレクションのマティスの行方—

アンリ・マティス《ニース郊外の風景》

(姫路市立美術館「國富奎三コレクション」)の来歴調査報告

陳岡めぐみ(国立西洋美術館 主任研究員)

2~6

國富奎三コレクション室常設展示作品の状態調査
及び修復事業概要中間報告(2020年度)

谷口 依子(姫路市立美術館 学芸員)

7~10

姫路市立美術館の刀剣について

森岡 榮一(姫路市立美術館 学芸員)

11~17

姫路市立美術館・学校連携プロジェクト

平成27(2015)年~令和1(2019)年度の取り組みについて

本丸 生野(姫路市立美術館 学芸課 係長)

18~29

序

姫路市立美術館研究紀要第19号を刊行します。

本号では、2020年度（令和2年度）の当館の調査研究活動のなかから、2018年度より3カ年計画で推進して参りました保存修復事業の概況報告「國富奎三コレクション室常設展示作品の状態調査及び修復事業概要（2020年度中間報告）」、開館当初より収集保管しながら専門的調査研究が未着手であった所蔵品の刀剣に関する基礎調査報告「姫路市立美術館の刀剣について」、そして2009年度（平成21年度）から本格的に取り組み継続してきた教育普及活動「学校連携プロジェクト」の直近5カ年の特色を総括する報告「姫路市立美術館・学校連携プロジェクト 平成27（2015）年～令和1（2019）年度の取り組みについて」の3本の報告を掲載するとともに、国立西洋美術館主任研究員の陳岡めぐみ氏より当館所蔵「國富奎三コレクション」に属する1点、アンリ・マティス《ニース郊外の風景》の来歴に係る極めて重要な調査報告「失われた松方コレクションのマティスの行方— アンリ・マティス《ニース郊外の風景》（姫路市立美術館「國富奎三コレクション」）の来歴調査報告」を特別にご寄稿頂きました。

1994年姫路城の世界文化遺産登録を記念して國富奎三氏よりご寄贈いただいたマティスをはじめコロ、シスレー、ピサロ、モネ、ドガ、ルオー、ユトリロなど25作家30件50点の同氏のフランス近代絵画コレクションのうち、従前より旧松方コレクションとして知られてきたブラングイン《ヴェニスの朝市》（1925年作）、コロ《湖》（1860年頃作）、ペヒシュタイン《帆船》（1912年作）、ルバスク《赤い服を着た女》（1930年作）、デスパリーニャ《読書する裸婦》（1930年頃作）の5点は、既に『松方コレクション西洋美術全作品』全2巻（国立西洋美術館／平凡社、2018-2019年）の第1巻に収録されているところです。前掲書第2巻383頁の「No.733 アンリ・マティス《森の中に横たわる二人の女》1921年、38×46cm、左下署名、所在不明」の情報を目にされた國富奎三氏から当館所蔵《ニース郊外の風景》と一致する可能性についての貴重なご所見を頂いたのは、去る2020年6月のことでした。早速、国立西洋美術館に詳細情報の共有などを打診したところご快諾を頂き、これを契機に松方コレクションのマティス《森の中に横たわる二人の女》と國富コレクションのマティス《ニース郊外の風景》の関係を審らかにする調査研究を進める運びとなりました。

ご寄稿者の陳岡めぐみ氏には、ご自身のご研究の最新状況を本号にてご発表いただきましたことに深謝申し上げます。また、「何よりも作品の質を重んじること」そして「日本人である私が手に入れる以上、文化財として日本に欠けているものを補う作品であること」などご自身の収集4原則*を信条とされ、優れた芸術に宿る崇高な価値の普及を願い、深い知見と貴重な情報を惜しみなくご提供いただいた國富奎三氏への敬意と感謝の意を改めてここに表します。

日頃の調査研究はもとより本誌刊行にあたり、ご指導ご協力を賜りました国立西洋美術館館長 馬淵明子氏をはじめ関係各位に衷心より感謝申し上げます。

姫路市立美術館 副館長兼学芸課長 不動 美里

※ 千足伸行「國富奎三コレクションとその周辺」『姫路市立美術館蔵 國富奎三コレクション』2016年3月発行 姫路市立美術館 pp.8-10 参照



アンリ・マティス / Henri MATISSE (1869-1954)
 《ニース郊外の風景》 / Paysage, environs de Nice / Landscape, Suburb of Nice

所蔵：姫路市立美術館「國富奎三コレクション」/ KUNITOMI Keizo Collection, Himeji City Museum of Art
 油彩・カンヴァス / Oil on canvas / 1918年 / 37.0 × 45.0 cm

作品情報 (註)

来歴 / Hist.:

Duveen Gallery, New York ; Lebel, Paris ; E.G.Bührle, Zurich ; Marlborough Fine Art, London ; Alex Reid & Lefevre, London ; Lloyd Bentzen, Houston, Texas ; Alex Reid & Lefevre, London

展覧会歴 / Exp.:

London, Tate Gallery, Private Views, Apr.-May., 1963, no.80

・1977年3月30日ロンドン、サザビーズ・オークションにて國富奎三氏落札以降の展示歴

郷土のコレクション 1985.6.1-7.14 姫路市立美術館、近代フランス絵画展 1988.3.9-4.10 ナビオ美術館、K氏コレクションによる近代

フランス絵画展 1989.5.12-6.4 山形美術館、6.15-7. 愛媛県立美術館、8.12-9.17 ふくやま美術館、11.3-12.10 安田火災東郷青児美術館

・1994年受贈後の姫路市立美術館展示歴

「國富奎三コレクション展」 1994.8.31-9.11、1995.8.2-8.20、1996.8.31-9.29、1997.6.4-7.13、1998.8.19-10.4、

2000.10.5-11.26、2001.9.5-10.28、7.11-8.11

2003.4より、常設展示「國富奎三コレクション 近代フランス絵画ーモネからマティスまで」として現在に至る。

・1994年受贈後の貸出展示歴

印象派から20世紀への絵画名作展 1998.10.10-25明石文化博物館、姫路市立美術館蔵 國富奎三コレクション展 印象派からマティスまで2001.4.28-6.1ニューオータニ美術館、6.30-7.30大阪市民美術センター、8.12-9.24兵庫県立円山川公苑美術館、2002.9.1-9.29大分県立芸術会館、2003.2.25-3.23岡山県立美術館

(註)

【姫路市立美術館蔵 國富奎三コレクション / Kunitomi Keizo Collection, Himeji City Museum of Art】2016年3月発行 姫路市立美術館 / March, 2016 Himeji City Museum of Art, p.16, p.64 参照。本作品マティスの《ニース郊外の風景》は1977年3月30日ロンドンのサザビーズ・オークションに國富奎三氏本人が参加し、内覧会場で作品を実見の上、落札し取得に至ったものである。上記の来歴は、この時のオークション・カタログに記載された情報に基づく。なお同氏が購入当時本作品の参考文献とされた『リッ

ツォーリ版世界美術全集22 マティス』（日本語版監修 摩寿意善郎 嘉門安雄 日本語版編集 乾由明 集英社、昭和50年/1975年、p.109）には、次の記載あり。[No.272 <ニース付近の風景>油彩、カンヴァス、38×46.5、f、1918年、ルフェーブル画廊の競売（ロンドン、1970年11月12日）に出た作品。] / Mario Luzi, Massimo Carra, *L'opera di Henri Matisse della rivolta fauve all'intimismo, 1904-1928, Classici dell'Arte*, 49. Rizzoli, Milano, 1971, ill. No.272. "PAESAGGIO NEI DINTORNI DI NIZZA, olio/tela, 38×46.5, opera fermata, 1918. Passato per una recente asta della Lefevre Gallery (Londra, 12-XI-1970)", p.97

また國富氏は、本作品取得後、マティスをはじめコロー、シスレー、ピサロ、モネ、ドガ、ルオー、ユトリロなどフランス近代画家の優品から成るコレクションを日本国内各地の多数の展覧会に出品公開している。1994年に姫路市立美術館が一括受贈後は、基本的に常設展示され現在に至る。日本国内における本作品の展示歴は上記の通り。（本注釈文責：不動美里 / 姫路市立美術館）

＜特別寄稿＞ 失われた松方コレクションのマティスの行方— アンリ・マティス《ニース郊外の風景》 (姫路市立美術館「國富奎三コレクション」)の来歴調査報告

陳岡めぐみ (国立西洋美術館主任研究員)

松方コレクションにはかつて1921年にパリの画廊から購入された6点のマティス作品があった。いずれもニース時代の作品で、そのうち現所在が確認できるのはバーゼル美術館所蔵の《長椅子の坐る女》、ジョヴァンニ・エ・マレッタ・アニェッリ絵画館所蔵の《室内で座る女》、パリ国立近代美術館所蔵の《座る二人の娘》だけである。しかし残り3点の中の《木陰の女たち》(《森の中に横たわる二人の女》)が、姫路市立美術館が所蔵するマティス《ニース郊外の風景》(2頁図版)である可能性が極めて高いことが近年わかった。この作品は1994年に同美術館が國富奎三氏から寄贈を受けた作品群の一部である。2つの作品をつなぐための来歴調査は始まったばかりであるが、本稿では現在までに判明している来歴情報を整理し、今後の調査の展望を示すこととする。

1. 松方コレクションのマティス

まず、松方コレクションについて概略を記しておく¹。神戸の川崎造船所(現・川崎重工業株式会社)を率いた松方幸次郎(1866-1950)は第一次世界大戦による船舶需要を背景に事業を拡大しつつ、日本に西洋美術の殿堂を作るべく、1916年頃から約10年にわたって商用で滞在したヨーロッパで西洋の美術品を買い集めた。コレクションは多様な時代・地域・ジャンルで構成され、フランスから買い戻した浮世絵の約8,000点も加えれば、1万点を超える規模であった。だが1927年、昭和金融恐慌のあおりで造船所は経営破綻に陥り、コレクションは四散する。日本に到着していた作品群は売り立てられ、ヨーロッパに残されていた作品も一部はロンドンの倉庫火災で焼失、別の一部は第二次世界大戦期のパリで疎開時代を経て敵国人財産としてフランス政府に接収された。このパリの松方コレクションは戦後の政府間の交渉によって1959年に日本へ寄贈返還され、その受け皿として国立西洋美術館が設立されることとなる。

パリの松方コレクションは、ロダン美術館の学芸員(事実上の館長)のレオンス・ベネディット(1859-1925)を協力者として主に1921-1922年のヨーロッパ滞在中に築かれ、ロダン美術館を保管場所とした²。そこには当初、6点のマティス作品が含まれており、《木陰の女たち》は1921年11月頃にベルネーム画廊からマルケ作品2点と合わせて3万フランで購入されたものである³。

一部の作品を除き、これらの作品は1930年代に入ってもロダン美術館に預けられたままとする一方、作品の管理は松方の部下であった日置釘三郎に託される。だがやがて第二次世界大戦が勃発、パリにもドイツ軍の侵攻が迫り、1940年初頭に松方コレクションはパリを出てフランス北西部の小村アボンダンの日置邸へ移された。輸送や保管の経費をまかなうため、日置は松方の許可を得て疎開当初にボナール5点とブーダン1点、そしてマティス6点を、その後さらにゴーガン1点、モネ6点、マネ1点を売却することとなる。

さて、松方コレクション全体の作品リストは知られていないものの、パリ保管作品については複数のリストが

¹ 松方コレクションに関する主要文献は『松方コレクション 西洋美術全作品』川口雅子・陳岡めぐみ共編著、全2巻、国立西洋美術館／平凡社、2018-2019年、および同書掲載の文献一覧を参照。

² パリ保管分の状況については特に『松方コレクション』前掲書第1巻、pp. 51-61、および、以下を参照。陳岡めぐみ「松方コレクション 百年の流転」『松方コレクション展』図録、国立西洋美術館、2019年、11-29頁。

³ 『松方コレクション』前掲書第1巻 p. 248, no. 733《木陰の女》、および第2巻補遺、383-384頁(《森の中に横たわる二人の女》の基礎データを参照)。

残されており、そこから作家名や作品名、サイズ、当時の作品管理番号を知ることができる⁴。2018年刊行の『松方コレクション 西洋美術全作品』第1巻（絵画編）にはここまでの情報が反映されている。一方、その後の筆者の調査により、ロダン美術館内で保管されていた松方コレクションを撮影したガラス乾板群がフランスの建築文化財メディアテークに収蔵されていることがわかった⁵。これによって、上述の売却作品をはじめ詳細不明であった一群の作品の図像が判明し、一部は作家のカタログ・レゾネ等との照合が可能となり、これらの新情報は2019年刊行の『松方コレクション』第2巻補遺に収録した。マティスの《木陰の女たち》もそうして情報が充実した作品の一つである。1921年にベルネーム画廊にあったという来歴情報および図版の一致から、マティスのカタログ・レゾネ⁶の457番《森の中に横たわる2人の女》との照合にいたった。

以上の調査から判明した松方旧蔵の《木陰の女たち》の情報をまとめると、サイズは38×46cm、松方コレクションの作品管理番号は「217」、カタログ・レゾネによる制作年は1921年、そして来歴と画像は以下の通りである。



©Ministère de la Culture (France), Médiathèque de l'architecture et du patrimoine, diff. RMN-GP

来歴：Galerie Georges Bernheim, Paris; purchased from Galerie Georges Bernheim by Kojiro Matsukata, Kobe, ca. November 1921, as 'Femmes sous les arbres' (Fr. 30,000 for two paintings by Matisse and two paintings by Marquet) ; sold by his custodian, Kōzaburō Hioki, Abondant/Paris, ca. 1940.

⁴ 『松方コレクション』前掲書第1巻、51-61頁。

⁵ 2019年の「松方コレクション展」では建築文化財メディアテークより全面協力を受け、同職員のBruno Martin氏にこのガラス乾板コレクションについて寄稿いただいた。本注2の松方展図録272-280; 337-340頁を参照。

⁶ G-P. M. Dauberville, *Henri Matisse chez Bernheim-Jeune*, 2 volumes, Bernheim-Jeune, Paris, 1995.

2. 《ニース郊外の風景》

一方、姫路市立美術館所蔵のマティス《ニース郊外の風景》は、サイズは37.0×45.0cm、制作年は1918年、そして現在公開されている来歴情報は以下の通りである。

来歴：Duveen Gallery, New York；Lebel, Paris；E.G. Bührle, Zurich；Marlborough Fine Art；Alex Reid & Lefevre, London；Lloyd Bentzen, Houston, Texas；Alex Reid & Lefevre, London

上述の《木陰の女たち》とこの《ニース郊外の風景》は、図像は完全に一致し、サイズもほぼ一致する。制作年については、前者のものはベルネーム＝ジュヌ画廊が管理していた作品写真（no. 457）の撮影年および来歴情報から推測された年と考えられる。

なお、パリのロダン美術館で保管されていた松方コレクションの作品の木枠や額裏には、しばしば当時の作品管理番号が残されている。姫路市立美術館の調査（7～8頁 図1～図5参照）によれば、《ニース郊外の風景》の裏面には来歴や展覧会出品歴に関わるラベル類のほか、木枠に各種の書き込みが残っているが、今回、《木陰の女たち》の作品管理番号にあたる「217」は確認できなかった。だが、カンヴァスの裏打ちなどがおこなわれた際に木枠が交換された可能性も否定できないところである。

作品来歴についてももう少し詳しく見てみる。1994年に姫路市立美術館は本作品を國富奎三氏より受贈し、現在同館「國富奎三コレクション室」に常設展示している。國富氏は1977年3月30日のロンドンのサザビーズのオークションに自ら参加して落札し、この作品を取得している。現在の情報の元となっているオークションのカタログには、さらに「1918年頃ジョルジュ・ベッソンがいる場で、ラ・マンテーニア La Mantegna において描かれた」とも記されている。ジョルジュ・ベッソン（1882-1971）は美術批評家、出版者であり、芸術家たちとの交流でも知られる。とくにマティスとの関係においては、1917年12月、マティスが「太陽と地中海に呼ばれて」ニースに到着したばかりの頃の様子を詳しく回想した記事を残している⁷。1917-1918年のニース滞在時にマティスはベッソンの肖像を2点続けて制作しており、そうした交流の中でこの作品も生まれたということになる。

上記の1977年のオークション・カタログの情報源はおそらく、旧所蔵者の一人エミール・ビュールレ（1890-1956）のコレクションに関する記録である。ビュールレは1930年代後半から1950年代にかけてチューリヒで優れた近代絵画コレクションを築いたドイツ人コレクターである。1956年の彼の死後、遺族は財団を設立し、1960年に美術館を開館、コレクションの1/3はここに移された。

2015年に美術館は閉鎖されたが、その後もビュールレ・コレクションは各地で展覧会を開催しつつ、ウェブサイトでは詳細な作品来歴調査の成果が公開されている⁸。これによると、《ニース郊外の風景》は1954年3月10日にパリのマックス・カガノヴィッチ画廊から購入され、1958年にロンドンのマルボロ画廊に売却されている。一方、当時の所蔵作品カードには、サイズ「38×46cm」、および来歴情報「ニースのラ・マンテウガ La Mantega に文筆家ジョルジュ・ベッソンが滞在していた1918年に描かれた；ニューヨークのアルバート・デュヴィーン画廊；パリ、ルベル [?]

が手書きで記されており⁹、ここに付けられた白黒写真の画像は松方作品、姫路作品と一致する。マックス・カガノヴィッチ（1891-1978）の画廊は19-20世紀美術を扱っていたパリの重要な画廊の一つである。これらから得られる新情報としては、言及された地名はラ・マンテーニアではなく、ニース北西のマンテウガ地区を指すと思われるラ・マンテウガであったこと、1954年にビュールレがカガノヴィッチ画廊から当該作品を購入したこと、デュヴィーン画廊とは、よく知られているジョゼフ・デュヴィーンの画廊ではなく、主にアメリカ美術を扱っていた従兄のアルバート・デュヴィーン（1892-1965）の画廊であったことである。「ルベル Lebel（判読困難、「Lebes」「Leber」「Lebei」の可能性もある）については詳細不明である。

⁷ George Besson, «Arrivée de Matisse à Nice. Matisse et quelques personnages», *Le Point*, juillet 1939, pp. 39-44.

⁸ https://www.buehrle.ch/fileadmin/user_upload/bilder/stiftung/bestandliste/BestandEGBengl.pdf（最終アクセス：2021年2月25日）

⁹ 筆者の問い合わせに対して、ビュールレ財団コレクション館長 Lukas Glow 氏が財団アーカイブのマティス作品に関する資料を確認、情報を提供してくれた。

前述の通り、《木陰の女たち》の方は1921年11月頃にパリのジョルジュ・ベルネーム画廊で松方が購入し、1940年頃におそらくパリで日置が売却したものである。仮にこの来歴と《ニース郊外の風景》が持つ来歴がつながるとすれば、デュヴィーンと「ルベル」の所蔵時期は、いずれか、もしくは両方が、①作品が制作された1918年以後、1921年に松方がベルネーム画廊から購入するまでの期間、あるいは②作品が再び市場に出た1940年以後、1954年にビュールレがカガノヴィッチ画廊から購入するまでの期間に位置する可能性が考えられる。

だが来歴情報のうちデュヴィーンと「ルベル」についてはあらためて慎重に調査する必要も出てきた。1954年の作品売買時にカガノヴィッチからビュールレに提供された作品資料には、「ラ・マントウガにおいて文筆家ジョルジュ・ベッソンがいる場で描かれた。[ラ・マントウガは] ニースから2キロメートルである (“Peint en présence de Georges [sic] Besson homme de lettres à La Mantega c'est 2 km de Nice (Alp. Mart.)”）」とのみ記され、来歴に関する記載はなかったことが今回明らかになったからである。

さらに、マティスの別作品《ニースのカーニヴァル》が1958年のチューリヒ美術館のビュールレ・コレクション展に出品された際(295番《ニースの花祭り》)、カタログには《ニース郊外の風景》に属するべきサイズ「38×46cm」と来歴「A. デュヴィーン画廊のコレクション、ニューヨーク；ルベル・コレクション、パリ；1954年にフランスの画商から購入 (“Sammlung A. Duveen, New York; Sammlung Lebel, Paris; erworben 1954 aus französischem Kunsthandel”）」が誤って記載されていたこともわかった。なお、《ニースのカーニヴァル》は遺族の手元に残った作品の一つである。ビュールレの死後、美術館創設に向けた準備の時期にある程度の混乱があったことは想像に難くない。

3. 今後の調査の展望

《木陰の女たち》／《ニース郊外の風景》をめぐる今後の調査の展望としては、ジョルジュ・ベッソンを出発点として作品制作時の状況をより詳しく調べるとともに、ベルネーム画廊とカガノヴィッチ画廊の作品売買の記録にあたり、これらの作品の来歴の空白を埋めていく調査が見込まれる。とくに1954年以前の《ニース郊外の風景》の来歴についてカガノヴィッチからさかのぼって明らかにしていくことは、いまだ不明点を残す第二次世界大戦期の松方コレクション研究との関係からも興味深い調査となるだろう。

来歴調査は近年ますます重視されているが、とくに1940年代前後の情報は美術品略奪問題との関係から大きな注目を集め、各国で精力的に研究が進展している。松方コレクションにおいても、マティスと同じく1940年代初頭に日置がパリで売却した作品の一つであるマネ《嵐の海》が複数の画商の手を経た結果、ナチス協力画商として知られるヒルデブランド・グルリットのコレクションに入り、戦争の悲劇を背負う作品群の運命と深く交差していたことが近年わかったばかりである¹⁰。《木陰の女たち》／《ニース郊外の風景》の来歴についても、周辺研究の問題を解き明かす鍵につながる新発見への広がり期待しつつ、今後より詳しい調査を進めていきたい。

¹⁰ 陳岡前掲論文、22-23頁を参照。なお、この作品は2019年に「松方コレクション展」出品後、国立西洋美術館が購入した。

國富奎三コレクション室常設展示作品の状態調査 及び修復事業概要中間報告（2020年度）

姫路市立美術館 学芸員 谷口 依子

1. 経緯

平成6（1994）年より、姫路城の世界遺産登録を記念して、市内在住の医師、國富奎三氏から姫路市に寄贈された國富奎三コレクションは、姫路市立美術館の中核を成す。自然主義、写実主義を掲げたコロー、クールベから、印象派のモネ、シスレー、ピサロ、フォービズムのプラマンク、エコール・ド・パリのユトリロ、さらに現代美術への道を切り開いたマチスに至るまで、同コレクションは西洋近代美術史の潮流を語るうえで欠かせない画家の作品で構成されている。これらは常設展示され、美術館の開館日に必ず見ることのできる名品として、長年、市民に親しまれてきた。

姫路市立美術館では平成30年度より休館期間を活用し、常設展示室國富奎三コレクションの作品の状態調査および修復事業3か年計画を策定してきた。本稿ではその3か年事業計画の最終年度である2020年度の修復の中間報告とともに、常設展示室の作品修復の調査の過程で判明したこと、今後の研究課題について概要を報告する。

2. 2020年度の國富奎三コレクションの調査、修復事業および3か年計画についての報告

本事業初年度から、作品調査に必要な科学分析（普通光線、斜光線、紫外線、赤外線、およびエックス線写真調査）、熟練した技術が必要とされる油彩画、額の調査・修復を、吉備国際文化財総合研究センターが担当した。2020年度は参考資料のとおり、油彩画8作品及び、紙3作品の額縁修復を行った。コンディション・チェックの結果をもとに、修復を担当する大原秀行氏（吉備国際大学副学長）と相談の上、修復の緊急性が低い、紙作品5点、彫刻作品1点は調査のみに留め¹、そのうち3点は額縁の修復（低反射ガラス、金具類の交換）を行った。

（参考資料）2020年度國富奎三コレクション室常設展示作品の状態調査及び修復事業対象リスト
作品リスト

No.	作品名	作者	制作年	素材
1	小公園	ラウル・デュフィ	1920年頃	油彩・カンヴァス
2	ミシェル・ビスヌーの肖像	ラウル・デュフィ	1934年	油彩・カンヴァス
3	ヴェニス朝市	フランク・ブラングウィン	1925年	油彩・ボード
4	女性の顔	ジャック・ヴィヨン	1924年	油彩・カンヴァス
5	サン・メダール教会とムフタル通り	モーリス・ユトリロ	1913年	油彩・板
6	赤い服を着た女	アンリ・ルバスク	1930年	油彩・カンヴァス
7	裸婦	アンリ・オットマン	1915～20年頃	油彩・カンヴァス
8	田舎の橋・コルシカ	アンドレ・ユッテル	1919年	油彩・カンヴァス

修復対象額縁リスト

No.	作品名	作者	制作年	素材
1	浴室の女（浴槽の裸婦）	エドガー・ドガ	1882～1883年	モノタイプ、パステル・紙
2	髪に花を飾る少女	オディロン・ルドン	1900～10年	パステル・紙
3	裸婦	アンドレ・ドラン	1925～30年頃	サンギース・紙

¹ アンドレ・ドラン《裸婦》、マックス・ベヒシュタイン《夫人像》、《フランク》、エドガー・ドガ《浴室の裸婦》、オディロン・ルドン《髪に花を飾る少女》、オーギュスト・ロダン《私は美しい》の6作品のこと。

(1) アンリ・マティス《ニース郊外の風景》の作品調査に関して

本紀要では、当館所蔵のアンリ・マティス作、《ニース郊外の風景》（2頁、図1参照）の詳細な来歴紹介およびコレクションとの同定に関して、陣岡めぐみ氏（国立西洋美術館主任研究員）にご寄稿いただいた。ここでは一次資料の作品裏面から読み解かれる作品情報について書き記しておく。

裏面には大小9個のラベルが貼られているのが確認された（図1）。そのうち作品情報と明確に紐づけられるラベルは3つ。一つ目は、1977年のサザビーズの売立目録に掲載されているように、1963年ロンドンのテートギャラリーで4月から5月にかけて開催された展覧会、「Private Views」に出品された際のラベルである。この時にはすでに作品のタイトルが現状と同じ『ニース郊外の風景』（仏語：Paysage environs de Nice）として記載されている。



(図1) アンリ・マティス《ニース郊外の風景》裏面



(図2) テートギャラリーの出品ラベル

二つ目は売立目録では来歴に記載されているロンドンのルフェーヴルギャラリーの名前が記載されたラベルである。ここでのタイトルも現在同様『ニース郊外の風景』（仏語：Paysage, environs de Nice）が記されている。

三つ目は中棧と右下の木枠に貼られていたドイツ語でのラベルだ。残念なことに、2つとも展覧会名が記載されている部分がはぎとられ、開催年、出品番号が記入されていない。作品のタイトルは同様に『ニース郊外の風景』（独語 Landchaft bei Nizza）が記されている。



(図3) ルフェーヴルギャラリーの名が記載されたラベル



(図4) ドイツ語で記載されたラベル（2か所）

ラベル以外にも額縁にいくつかの数字が彫り込まれ、チョークで番号が書き込まれている。



(図5) 数字が彫り込まれた額縁裏面

本作は一度裏打ちが施されているものと考えられるが、本事業で本作の修復を担当した大原氏によると、木枠の裏打ちは蜜蝋での裏打ちとなり、1970年代から1980年初頭のものと同様に推測されることであった。1919年にジョルジュ・ベッソンがいるニース郊外で制作されたとされる本作は、松方の手を離れたあとパリ、ニューヨーク、ロンドン、スイスへと所蔵先を変更してきたが、奇しくも他の松方コレクションとともに姫路市立美術館國富奎三コレクションとして所蔵され、一般公開されている。今回の裏面調査と作品来歴調査で明らかとなった情報を元に、本作の更なる作品情報の展開を進めていきたい。

(2) 福島コレクションの証跡

國富奎三コレクションには画商で美術批評家でもあった福島繁太郎氏が滞欧期に蒐集した「福島コレクション」が3点含まれている²。本年度修復されたラウル・デュフィ《小公園》（図6）は福島コレクションのうちのひとつであるが、裏面に福島自身が木枠に書き込んだとみられる署名と作品タイトルが確認された（図7）。このほか、裏面は画面右下の楔が抜け落ち、制作の後に貼りなおされた跡が左辺の縁に確認された。（図8）

本作が制作された1920年代にデュフィはベルネーム＝ジューヌ画廊と契約を交わし、個展を開催。1925年には国からも作品制作の注文を受けるなど、画家としての才能が認められた充実期であった。同時にデュフィは新しい表現を求めてイタリアとシチリアを訪れている。シチリアの光に魅せられたデュフィは、習作をもとに多数のシチリア風景をアトリエに戻ってから制作したことが知られている。この時期の作品には、オリーブ畑を描いた作品を幾つか残しているが、そのうちのひとつは、人物こそ描かれているものの、画面中央に白い小道を描き、簡素化された木々が広がる光景が広がっており、本作に近い構図で描かれている。興味深いのは、今回の調査にて確認された裏面中棧に鉛筆で書きこまれた文字である。（図9）

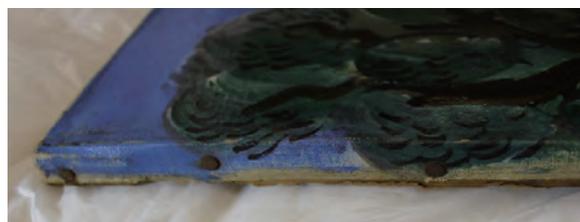
中棧には「VD r ■■■ dans les oli ■■■」という鉛筆書きの文字が書き込まれている。書かれた文字の詳細な判別は困難であった。文字の後半を「dans les olives」（和訳：オリーブ畑で）と読み取るのであれば、シチリアの光に魅せられたデュフィがこの時期に描いた現地の光景である可能性は高い。福島は木枠に「小公園」と記しているが裏面の情報も加えつつ、作品の主題や制作背景をより深く明確にしていきたい。



(図6) ラウル・デュフィ《小公園》1920年頃



(図7) 《小公園》の裏側
福島の署名と作品のタイトルが確認できる。



(図8) 《小公園》左側面部分



(図9) 小公園裏面の中棧

² 2019年度の作品調査、修復事業にて、作品調査でアンドレ・ドラン作《裸婦》の裏面には、作家名とともに、福島本人による「福島繁太郎」と日本語の署名入りの紙が直接作品印が確認された。このほか同コレクション作品はジョルジュ・ルオー作《町外れ》である。

(3) エドガー・ドガ作《浴室の裸婦（浴槽の女）》

ドガはモノタイプでの作品の制作を1870年代から始め1890年代まで続け、この技法およびそれを基本にした作品を約300点以上残している。その中で、「室内の裸婦」もしくは「浴室の裸婦」を主題にした作品は45点³。この主題の作品には西洋の伝統的な神話や聖書に登場する裸婦ではなく、同時代の街の女が浴槽で、体を曲げてスポンジで体を洗う姿や髪を梳かす姿が描かれている。私的空間で裸になる彼女たちの姿を盗み見るように描くドガの作品は、都市生活の生々しさを見事に描き出している。

本作《浴室の裸婦（浴槽の女）》(図10)もそのうちのひとつである。モノタイプの作品を制作する際、ドガはひとつの版を刷るときに同じ刷りで何作が制作することもあったといわれている。本作も一回目の刷りは、現在シカゴ研究所所蔵の《化粧室（入浴）》(1882年頃制作)であり、2度目の淡い刷りの上にパステル画で彩色された作品。今回の修復では作品の状態が良く、調査と額縁の修理を行うだけに留めた。

額を外すと、2つの興味深い点が見受けられた。ひとつめは、裸婦像が描かれた図版の四方は鉛筆で沿ったあとや、プレスした跡が見られることだ。(図11、12) ふたつめは、裏面に書き込まれた文字である(図13、14)。書かれている文字を詳しく判別をすることは難しいが、赤や青のパステル、あるいは色チョークのようなもので書き込まれており、画家がパステルで彩色している際に書き込まれた可能性もある。これらの痕跡は、他のドガの裸婦像、とりわけ1回目の刷りが行われたシカゴ研究所の作品との比較を行うことが今後の課題となった。

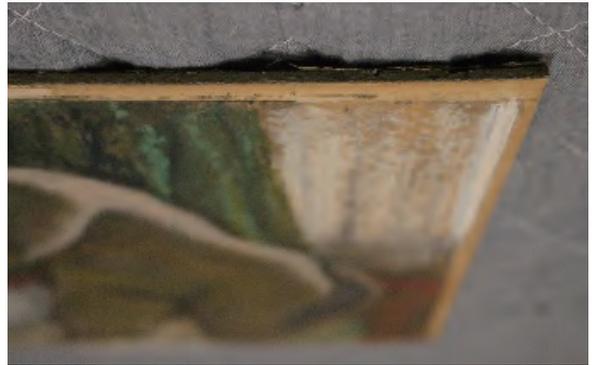
モノタイプが制作された期間は数々の代表作を残した時期と重なる。本作品はドガのモノタイプの制作過程の一例をより具体的に、明確に物語る作品であることが、今回の調査で明らかとなった。今後さらなる調査研究を進めたい。



(図10) エドガー・ドガ《浴室の裸婦（浴槽の女）》



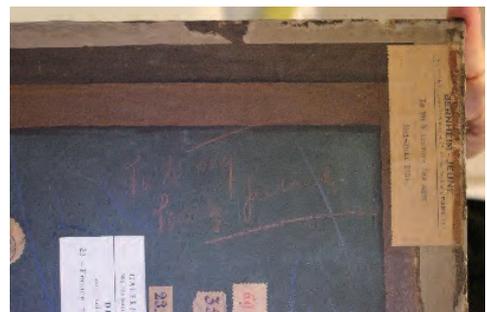
(図11) 額縁を外した状態



(図12) 部分拡大



(図13) 作品裏面



(図14) 裏面部分

³ ドガのモノタイプの作品に関しては以下の文献を参照した。内田照代、「19世紀フランス美術における「触覚性」——エドガー・ドガのモノタイプ版画のテクスチャーと彫刻作品の現地調査」、『メタプティヒアカ：名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』、2011年、120-128頁。Jean Adhémar et Françoise Cachin, introduction de John Rewald, "Edgar Degas ; gravures et monotypes", Paris, 1973.

(1325)と嘉暦4年(1329)には、武蔵国秩父郡の地頭・大河原時基が播磨国宍粟郡三方西荘(宍粟市)で長船鍛冶の景光・景政に鍛刀させた太刀が現存している。後者は、播磨国の広峰神社(姫路市)に奉納されたものである。また室町時代には、嘉吉の乱で没落した赤松氏を再興した赤松政則(1455~96)は、播磨・備前・美作3国の守護大名であったが、自ら播磨国坂元(姫路市)などで鍛刀してその刀剣を家臣・被官たちに恩賞として与えたのである。

江戸時代になると、日本各地に分封された大名は城下町を造成し、家臣団を集住させ、鍛冶を家臣とする。姫路城を建造した池田輝政は、大坂新刀初代助広の弟子・多田宗重を重用した。江戸時代前期後半頃からは、姫路城下の手柄山麓には鈴木宗栄の一派が居住し幕末まで続いている。また中期には、手柄山に三木新兵衛氏重がいた。三代氏重は、藩主・榊原政岑の命により氏繁に改名した。二代氏繁の弟である正繁は、特に見事な濤欄刃を焼く名人で、大坂・江戸でも作刀し奥州白川藩の抱鍛冶となっている。

刀剣は、独特の美を持っている。もともとは武器として生まれ、命を賭して用いられたが、その美しさの根源は用を旨とした機能美から出発している。また名刀は、単なる武器としてではなく、長年にわたって宝物として、また美術品として大切に扱われてきた歴史を持っている。

刀剣の歴史

日本の鉄の武器の始まりは、弥生時代中期中葉頃に鉄剣が大陸から伝来した。日本刀の起源は、古墳時代の6世紀末頃で、このころには国内で直刀が製作されている。直刀は、後世と同じ様な地肌・刃文を持つことがわかっている。その後、武士の勃興と共に平安時代中期頃には、反りを持つ弯刀が誕生したと考えられている。平安時代から鎌倉・室町時代初期頃までは、刃を下にして腰に佩用した太刀が主流で主に馬上戦にて使用された。

そして戦闘が激化した南北朝時代頃から打刀が出現し、室町時代中期頃にはだんだん隆盛となってゆくのである。打刀は、刃を上にして腰帯に指す形式で、戦いが徒歩での接近戦が流行することにより、急速に発展していった。刀は、応仁の乱や戦国期の動乱の時期に頂点を迎え、多数生産され消費された。江戸時代の武士は、この打刀と脇指を帯に指す形式が主流となったのである。江戸時代中期以降は、富裕な町人や百姓が鍛冶に鍛刀を依頼し脇指を指したのである。また拵えに贅を尽くし、華美なものが現れた。

姫路ゆかりの刀剣

姫路ゆかりの刀剣の嚆矢は、古墳時代5世紀後半の宮

山古墳から「銀錯貼金環頭大刀」「三葉環頭大刀」が見られているが、いずれも大陸製と考えられている。8世紀になると『播磨国風土記』に、北部山岳地帯・宍粟郡の敷草村(宍粟市千種町千草)や佐用郡大撫山(佐用町西河内)から良質の砂鉄が生産され踏鞴吹きによる製鉄が行なわれていた。また『続日本紀』養老6年(722)3月辛亥(10日)条には、「播磨国忍海漢人麻呂・韓鍛冶百依」の名が見え、『延喜式』木工寮にも「播磨国鍛冶戸十六煙」とあり鍛冶職が居たことが判る。これらの鍛冶たちが、この和鉄で刀剣類などの鉄製品を生産していたと考えられる。

鎌倉~室町時代にも、宍粟郡北部の山地では各所で砂鉄が採掘され、踏鞴吹き製鉄が行なわれた。特に千種(千草・宍粟市千種町)で生産された良質の玉鋼を、備前長船鍛冶は愛用し広く世に知られるようになる。正中2年(1325)と嘉暦4年(1329)には、武蔵国秩父郡の地頭・大河原時基が播磨国宍粟郡三方西荘(宍粟市)で長船鍛冶の景光・景政に鍛刀させた太刀が現存している。後者は、播磨国の広峰神社(姫路市)に奉納されたものである。また室町時代には、嘉吉の乱で没落した赤松氏を再興した赤松政則(1455~96)は、播磨・備前・美作3国の守護大名であったが、自ら播磨国坂元(姫路市)などで鍛刀してその刀剣を家臣・被官たちに恩賞として与えたのである。

江戸時代になると、日本各地に分封された大名は城下町を造成し、家臣団を集住させ、鍛冶を家臣とする。姫路城を建造した池田輝政は、大坂新刀初代助広の弟子・多田宗重を重用した。江戸時代前期後半頃からは、姫路城下の手柄山麓には鈴木宗栄の一派が居住し幕末まで続いている。また中期には、手柄山に三木新兵衛氏重がいた。三代氏重は、藩主・榊原政岑の命により氏繁に改名した。二代氏繁の弟である正繁は、特に見事な濤欄刃を焼く名人で、大坂・江戸でも作刀し奥州白川藩の抱鍛冶となっている。

古刀と新刀

刀剣は、日本歴史のなかで安土桃山時代の慶長元年(1596)を境として、文禄以前に製作された刀剣を「古刀」と呼んでいる。そして、慶長以降に製作された刀剣を「新刀」という。古刀のうち、奈良時代以前に製作された直刀を「上古刀」と呼んでいる。直刀は、弥生~古墳時代に最初は大陸から伝来しその後国産されて、平造から切刃造へと変化した。平安時代中期頃には反りのある弯刀(太刀)が出現しこれは鑄造である。

新刀は、単に新しい刀の意味ではなく、作風及び製作の諸条件が古刀と大きく変化しているのである。大名の城下町に刀鍛冶が定住したのは、交通流通の発達によっ

て鉄材（玉鋼）が容易に入手出来るようになった結果である。そしてこれが、刀剣の地がねに地方色がなくなった原因である。新刀期は大別して、三つに区分される。はじめは、慶長から寛永年間末までの時期で「慶長新刀」と呼ばれている。次は、寛文から延宝年間を頂点とする「寛文新刀」である。最後は、「新々刀」と呼ばれる天明・寛政年間から幕末に至る時期のものである。

刀剣の美・鑑賞の壺

刀剣は、「どれを見ても同じに見える。どこに、国宝の刀と他の刀の違いがどこにあるのか」という言葉をよく聞かされる。また「名刀ですか？切れますか？」という問いかけもよくある。

刀剣の美とは、その姿と鍛え肌、刃文、帽子、茎形、銘文などを鑑賞することである。鍛え肌は、鋼をいく度も折り返して鍛錬したことによって現れたさまざまな働きである。地肌の名称は、材木の肌合いと同じで、板目・

柎目・柰目・梨子地などという。また肌がよく現れたものを肌立つといい、その反対を肌詰むと呼んでいる。地肌にも、さまざまな働きが現れている。地沸や地景、映りで、映りにも種類があり、白け映り、地沸映り、棒映り、乱れ映りなどがある。

刃文は、折り返し鍛錬して形造った刀身に、焼き刃土を塗る土取りをして、高温に熱して水の中に入れることによって生まれるものである。刃先一帯の白く見える部分で、硬度の高い鋼となっている。刃文は、刀工の技量・個性そして美意識が最も表わされた部分といえるだろう。また刃文は、単に切れることを目的としたものではなく、丁子刃・互の目刃・弯刃・皆焼など様々な変化を見せて美感にうったえているのである。

刀剣は、日本人の心情に深く染み渡った美意識の一面を表わしたものであり、私たちの魂に強く訴えかける神秘の力を秘めているのである。

個別解説

1 刀 銘 為小倉小四郎源則純兵部少輔源朝臣政則

1口 延徳元年（1489）

この刀は、室町幕府の播磨・美作・備前三ヶ国の守護であった赤松政則（1455～96）が鍛刀したものである。政則は、自ら槌を振って作刀し14口の作品があったことが判明している。（現存は9口）政則は、書写坂元（姫路市）や美作国大原（岡山県）、京都で製作し、そのほとんどを恩賞として家臣・被官たちに与えている。本刀は、延徳元年（1489）に政則が美作大原の陣中で鍛刀し、近臣の小倉則純に与えたものである。地肌の鍛えは、小板目肌がよく詰み、地沸がついている。刃文は、ゆったりと寄せる小さな波のような湾れ刃に、丸い基石が連続したように焼頭が揃う互の目丁子刃を交えている。刃には、白い砂粒の様に見える沸が刃縁から刃先に向けて筋状に射し込んだ足や、刃中から点状に浮かぶ葉が盛んに入り、刃中の沸が箒で掃いたように線状に連なる砂流しがかかっている。表の刀身に「八幡武大神」、裏に「春日大明神」神号彫刻がある。これは、山名氏との合戦にて真弓峠で敗れた時に姫路城への退却を則純が進言し、その後春日社に祈念して山名勢に大勝したことに起因していると考えられる。なお八幡武大神は、弓矢の神・八幡神のことである。政則の作刀中で、傑作の一口である。法量 刃長 60.2cm 反り 1.6cm



2 脇指 銘江州野洲郡玉造庄吉次作 明應五年五月日
1口 明應5年(1496)

本刀は、近江国野洲郡玉造庄(滋賀県野洲郡高木)の鍛冶・吉次が明應5年に作刀したものである。吉次は、京都鞍馬吉次と同人と考えられ美濃国関鍛冶の系統をひく鍛冶である。玉造庄は、この時期には京都相国寺領で、代官職として室町幕府奉行人・飯尾加賀守清房が支配していた。

この脇指の出来は、鞍馬吉次の作刀とは全く異なり、長船勝光の出来に怪しいまでに似ている。刃文の上半身は美濃風の焼刃で、下半身は長船勝光によく似た刃文となっている。地肌は、板目肌流れ、刃文は丁子乱れ刃を焼いている。刀身の彫物は、表が棒樋の樋内に三針柄剣の上に降竜を彫り、裏に真の俱利伽羅竜を彫刻している。長船鍛冶を支配していた赤松政則と、幕府の所司代であった浦上則宗や飯尾清房の関係を類推させる貴重な資料である。

法量 刃長 57.8cm 反り1.7cm



3 脇指 銘備前国住長船次郎左衛門尉勝光同左京進宗光
1口 永正7年(1510)

この脇指は、赤松政則の養嗣子である赤松義村が、長船鍛冶の勝光・宗光に命じて鍛刀させ、魚住実安に与えたものである。義村(?~1521)は、一族の赤松政資の子で政則の娘「松」の婿である。魚住実安は、播磨国明石郡魚住庄(明石市魚住)出身の国人で、南北朝時代に魚住城を築城し、赤松氏の被官であった。「大中臣」姓を名乗り、一族は住吉神社の神官を務めた。実安は名を又四郎といい、河内守を称した。長船鍛冶の次郎左衛門尉勝光は、右京亮勝光の子である。初めは、「二郎左衛門尉」と銘を切り、永正元年(1504)頃から「次郎左衛門尉」と刻んでいる。叔父の左京進宗光や与三左衛門尉祐定、祐定の子の次郎兵衛尉治光との合作がある。長享3年(1489)から天文9年(1540)までの年紀のある作刀が確認できる。左京進宗光は、六郎左衛門尉祐光の次男で永享9年(1437)に生まれた。兄右京亮勝光との合作が多く、兄の没後は本刀のように甥の次郎左衛門尉勝光との合作がある。その作刀の年紀は、文明元年(1469)から享禄3年(1530)までの長期にわたっている。恐らく94歳頃まで鍛刀したと考えられ、元気で長寿な鍛冶であったと推定される。勝光とならんで、末備前の初頭を飾る名工である。

地肌は、小板目がよく詰み、映りが立ち、匂出来の互の目丁字刃を焼き小沸がついている。裏銘の「応上仰」は、「上(かみ)の仰せに応じ」と読み、本刀が義村(上)の言いつけによって魚住実安のために作刀されたことが判る。播磨国ゆかりの貴重な刀剣である。

法量 刃長54.5cm 反り1.5cm



4 脇指 銘三州住人波多野長左衛門尉久次播州飾東郡
於姫路宗重作之

1口 慶長9年(1604)

この脇指は、薙刀の茎と切先を切断して反りを伏せて脇指として用いたもの。本刀は、慶長9年に姫路城下に居住した鍛冶「宗重」が波多野久次のために鍛刀したものである。宗重は、初代助広の門人で本名は多田宇兵衛(後に宗兵衛)という。波多野久次は、姫路城主池田輝政の家臣で、三河吉田時代に出仕したと考えられる。『池田分限帳』【慶長18年(1613)】の波多野丹波組に波多野久八(250石)がおり、久次の弟か子息かもしれない。慶長19年大坂冬の陣では、池田利隆は軍勢を率いて10月19日に姫路を出発して尼崎城に入った。その後12月1日に神崎川を越え、中津川を渡って野田・福島から天満口に至ったのである。利隆は、天満橋際から上手半町(約50m)の所に陣を置き、熊谷十左衛門の指揮のもと波多野一族などに天満口城門へ攻め寄せさせた。しかし城中よりの銃撃が激しく、波多野一族も応戦したが攻めあぐね、増援を依頼したことが『池田家譜』などに記されている。恐らくこの薙刀は、大坂陣で戦功をあげた証左として大切に伝来されたものと考えられる。

鍛えは、空目肌肌立ち、刃文は直刃に小互の目が交じり湾れている。江戸時代中期以降に、薙刀を脇指に改造して腰に指したものである。

法量 刃長51.8cm 反り2.4cm



5 刀 銘於播陽手柄山麓藤原右作之

1口 宝永元年(1704)

この刀は、姫路城下の手柄山山麓に居住した鍛冶「右」が、宝永元年5月に湯口祐頼の依頼で鍛刀したものである。同年5月28日に姫路藩へ榊原政邦(1675~1726)が越後村上から転封してきているので、湯口祐頼は政邦に仕えた家臣と考えられる。鍛冶「右」は、鈴木五郎右衛門宗栄(?~1708)といい、岡山藩池田家に仕えて藩主の命により左文字の刀の写し物(模作)を鍛えたところ抜群の出来で、「古の左文字、今の右文字」なりと賞せられ「右」の字を拝領して改名したと伝える。鍛えは、小板目肌が特に細かくよく詰み地沸つき、直刃調に互の目が交じりよく足入る刃文を焼く。姫路ゆかりの刀剣である。

法量 刃長72.9cm 反り1.9cm



6 刀 銘大和太掾藤原氏繁作 於播陽姫路城下手柄山麓
1口 江戸時代（中期）



本刀を製作した初代「氏繁」は、本名を三木新兵衛（？～1755）といい、元文年間（1736～41）頃に姫路藩主榊原政岑（1715～1743）の命により、父の名を継承した氏重（3代目）から氏繁へ改名したと伝える。地肌は、小杓目肌がよく詰み、沸出来の互の目交じりの丁子刃を焼く。城下町の手柄山麓に居住し鍛刀した作品である。
法量 刃長72.4cm 反り2.6cm

7 脇指 銘播州手柄山氏繁入道丹霞男良俊彫之
1口 江戸時代（後期）



この脇指は、2代「氏繁」が鍛刀したもの。本名は三木新兵衛（？～1783）で、本刀の茎に記すように入道して「丹霞」と号した。銘文の「男良俊彫之」は、子息の良俊が表の昇竜と裏の護摩箸・蓮台の刀身彫刻を施したという意味である。恐らく良俊は3代氏繁（？～1790）の名と考えられる。地肌は、板目肌よく詰み、沸出来の湾れがかった広直刃を焼く。珍しい父子合作刀である。
法量 刃長54.8cm 反り1.4cm

8 脇指 銘奥州白川臣手柄山正繁

1口 享和2年(1802)

この脇指を製作した正繁は、本名三木朝七(1760～1830)で丹霞氏繁(2代目)の次男として宝暦10年、姫路手柄山麓で生まれた。兄の新兵衛氏繁が早世したので、その跡を襲って4代目氏繁(氏重)となる。天明年間の初め頃に大坂で鍛刀し、天明8年(1788)に白河藩松平越中守楽翁に500石で召し抱えられ、江戸に移住し、神田駿河台や八丁堀で鍛刀した。この頃に正繁と改名したと考えられる。享和3年(1803)甲斐守を受領し、入道して丹霞齋と号した。晩年作には、楽翁より「神妙」の二字を拝領し、茎に刻んでいる。文政元年(1830)頃に一時期大坂で作刀し、また江戸へ帰り、文政13年7月5日に江戸にて没した。享年71。

この脇指は、享和2年(1802)2月に、岩国正路の注文で製作したものである。正路が「竹某」のために、水心子正秀の様な刀を依頼し、正繁が大和守の時に作刀したことが銘文から判明する。地肌は小杓目よく詰み無地肌風となり、刃文は沸出来の大互の目風の濤欄刃を焼く。刃中は白く冴え、互の目の頭が尖る刃がしばしば交る。依頼主や、製作年・経緯が判明する貴重な作品である。
法量 刃長51.4cm 反り1.0cm

【裏銘解説】

岩国正路為竹某乞余及水心
子所作余則作小余称大
和守之期已近云享和壬戌二月日

【裏銘読下】

岩国正路、竹某の為、余に水心子に及ぶ所の作を乞い、余則ち其の小を作る。余が大和守を称するの期、已にしての近、(爾)云う。

【裏銘解説】

岩国正路は、竹某のため、余に水心子正秀の傑作に及ぶ作刀を乞われたので、余はそこで小(脇指)を作った。余が大和守を称して間もない近作である。以上の通りである。



姫路市立美術館・学校連携プロジェクト 平成27（2015）年～令和1（2019）年度の取り組みについて

姫路市立美術館 学芸課 係長 本丸 生野

〔はじめに〕

姫路市立美術館では、平成21年度から令和1年度まで、学校との連携プロジェクトを実施してきた。これは、小・中・高のいずれか1校と美術館が連携して共同教育を行うもので、小中学校対象は“アーティストによるワークショップを通じた制作”、高等学校対象は“所蔵作品との対峙と自己表現”を主要な活動として位置付け、実施を重ねた。11ヵ年で小学校4校、中学校1校、義務教育学校1校、高等学校6校との実績がある（表1）。

本稿では、全12回にわたったプロジェクトのうち、平成27年度以降の取り組みを振り返りたい。^{*1}これら5ヵ年の取り組みは、美術館が地域の小学校・中学校・高等学校とアーティストをつなぐハブとして関わったものばかりである。

実施にあたっては、先行して姫路市小中学校図工・美術担当者会議、校長会等で募集の告知を行った。概ね4月～5月締切で募集を行い、応募校から1校を実施相手校として決定。その後実施相手校とアーティスト、そして美術館による協議を重ねる中で事業の方向性を検討した。その後、美術館が主体となり、学校側のねらいと作家性をすり合わせる中で、共同教育の具体案を作成し、実施に移るといった流れであった。

（表1）

年度	連携校	プロジェクト名	公開
平成21(2009)	姫路市立姫路高等学校	ほくらの視点×あなたの出会い	10月14日(水)～17日(土) (姫路市民ギャラリー)
平成22(2010)	兵庫県立香寺高等学校	心で見、心で伝える	10月2日(土)～10日(日) (姫路市民ギャラリー)
平成23(2011)	姫路市立飾磨高等学校	高校生が選んだ郷土の名品展	11月24日(水)～12月4日(日) (姫路市民ギャラリー)
平成23(2011)	姫路市立家島小学校	藤原向意×姫路市立家島小学校	11月28日(月) (姫路市立家島小学校)
平成24(2012)	姫路市立琴丘高等学校	巨匠に学ぶモダンアート ～素材と技法をめぐる6つの視点～	11月18日(日)～11月25日(日) (姫路市民ギャラリー)
平成25(2013)	姫路市立香呂小学校	笠木絵津子×姫路市立香呂小学校	11月7日(姫路市立香呂小学校)、 12月21日～23日(姫路市立美術館)
平成26(2014)	兵庫県立龍野北高等学校	つむぐ～巨匠たちの夢の続き～	12月12日(金)～25日(木) (姫路市民ギャラリー)
平成27(2015)	姫路市立城乾中学校	吉本直子×姫路市立城乾中学校 95の声～ The Form of our Hearts	12月9日(水)～20日(日) (姫路市民ギャラリー)
平成28(2016)	姫路市立大津小学校	内藤絹子×姫路市立大津小学校 手で発見！「私の心」浮かび上がる145の 気持ち～拓本プロジェクト	12月13日(火)～25日(日) (姫路市民ギャラリー)
平成29(2017)	兵庫県立姫路西高等学校	永井一正×姫路西高 SGH40 「思考する LIFE」	12月9日(土)～24日(日) (姫路市民ギャラリー)
平成30(2018)	姫路市立白鷺小中学校	松井紫朗×姫路市立白鷺小中学校 「センス・オブ・ワンダー～未来の私たち へのメッセージ～」	12月11日(火)～23日(日) (姫路市民ギャラリー)
令和元(2019)	姫路市立勘野小学校	高浜利也 - Community on the move @Azono 姫路市立勘野小学校×姫路市立美術館	12月7日(土)～22日(日) (姫路市民ギャラリー)

2009（平成21）年度は全国高等学校美術・工芸教育研究大会兵庫大会実行委員会が主催

平成27年度以降の取り組みを以下に振り返りたい。

〔平成27（2015）年度 学校連携プロジェクト〕

1 概要

平成27年度の学校連携プロジェクトは、初めて中学校が対象校となった。姫路市立美術館から徒歩10分ほどの位置にある姫路市立城乾中学校である。参加生徒は全2年生95人（3クラス）。参加アーティストは、現代美術家の吉本直子である。吉本直子は加西市生まれ。1995年京都大学教育学部教育心理学科を卒業し、2000年に川島テキスタイルスクールを卒業。2006年には文化庁新進芸術家海外留学制度派遣研修員としてイギリスにて研修、2007年にはポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスに滞在した。2012年には当館で開催の3人展「吉本直子・久保健史・浅田暢夫—内包の布 空間の石 存在の写真」に出品するなど、当館とのつながりも深い。

アーティストを招いての授業は、10月8日と15日にそれぞれ1クラス2時間ずつ、トータル4時間行った。その後、朝見教諭の指導のもと、1～2ヵ月かけて生徒はそれぞれに自己を見つめ、一人ひとりの思いを作品に託

した。完成した作品は、吉本直子作品と映像（授業風景をまとめたもの）と共に、姫路市民ギャラリー特別展示室で公開した。

プロジェクト名称 吉本直子×姫路市立城乾中学校 95の声～ The Form of our Hearts
 アーティスト 吉本直子（現代美術家）
 連 携 校 姫路市立城乾中学校（山下哲司校長）
 対 象 生 徒 全2年生、3クラス95人
 指 導 教 員 朝見真美子教諭、堀晶子教頭
 担当学芸員 本丸生野

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 2015年10月8日（木）1・3・5時間目 吉本直子による授業「吉本作品の素材と作品を学ぶ」（1クラス1時間ずつ、全3クラスで実施）
- (2) 10月8日（木）2・4・6時間目 吉本直子による授業「思考と技法の関係を学ぶ」（1クラス1時間ずつ、全3クラスで実施）
- (3) 10月15日（木）1・3・5時間目 吉本直子による授業「グループワーク：自作プランの説明と質疑応答」1クラス1時間ずつ、全3クラスで実施）
- (4) 10月15日（木）2・4・6時間目 吉本直子による授業「自作プランの熟成」（1クラス1時間ずつ、全3クラスで実施）
- (5) 10月下旬～11月 朝見真美子教諭の指導による制作活動

【プロジェクト第2期：展覧会】

- (6) 12月8日（火）展示作業
- (7) 12月9日（水）～20日（日）学校連携プロジェクト展

2 実施のながれ

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 2015年10月8日（木）吉本直子による授業① 1・3・5時間目

吉本直子による授業「吉本作品の素材と作品を学ぶ」（1クラス2時間ずつ、全3クラスで実施）

学芸員からのアーティスト紹介の後、吉本直子の自己紹介で授業がスタートした。「この教室の中には、私の作品の材料にしたい、と思うものが沢山あります。何だと思いませんか？」との問いに、教室を活き活きと見回す生徒たち。生徒の中に内的動機付けを生み出しながらの授業展開となった。問いの答えは“生徒たちが今身に着けている制服”だった。「洗濯しても残っている染みや汚れは、それを誰かが着て過ごした痕跡。大好きなんです。」—その言葉は、素材（作品の材料）を見つめ直すきっかけをつくった。その後、前の大きなテーブルに集まり、吉本直子が持参した古いハンカチや手袋、蛇の抜け殻を観察し、それらのモノがどういうものなのかを考察した。

その後、吉本直子による自作トークへと移った。これまでの自身の作品をスライドや実物で鑑賞し、生徒はワークシート①に気付きを記入した。さらに、ワークシート②に、解説作品を3つのキーワード（素材、技法、考え・思い）で分析して記入した。

- (2) 10月8日（木）2・4・6時間目 吉本直子による授業「思考と技法の関係を学ぶ」（1クラス1時間ずつ、全3クラスで実施）

(1)の続きとして、次の内容の授業を行った。まず、前時に鑑賞した作品について、解説および実演により技法への理解を深めた。例えば、脱染（漂白）によって人の記憶が失われていくことを示したり、防護服への刺繍によって、制度やモノ自体の脆弱さを表現したりというものである。行為（作品を制作する手段・技法）と表現（その結果生じる意味）についての関係を考察した。初期から最新作品までの吉本直子作品を鑑賞するだけでなく、作者との直のやりとりを経て熟考することにより、生徒たちは作品と作者とのリアルな接点について実感するとともに、制作の計画を立てるための必然性や着眼点を学んでいった。

- (3) 10月15日（木）1・3・5時間目 吉本直子による授業「グループワーク：自作プランの説明と質疑応答」1クラス1時間ずつ、全3クラスで実施）

10月8日の授業終了時に、次回授業までに記入するワークシート③「自分の作品について言葉・図案で考えてみよう」を配布し、あらかじめ自宅等で記入しておいてもらった。まず、グループごとに机を集めてまとめ、このシートにそれぞれが記入してきた内容を発表し合い、質疑応答を行った。自分の書いた内容を第三者に伝えることで考えを再確認し、他の生徒からの質問や意見を聞くことで現状のプランから課題を抽出した。

- (4) 10月15日（木）2・4・6時間目 吉本直子による授業「自作プランの熟成」（1クラス1時間ずつ、全

3 クラスで実施)

前時の取り組みを踏まえ、ワークシートに加筆・修正を行った。その間、吉本直子、朝見教諭、学芸員が生徒の席を一つ一つ巡り、個別相談を行った。生徒たちは、第三者とのコミュニケーションを経て、制作計画を完成させていった。

(5) 10月下旬～11月 朝見真美子教諭の指導による制作活動

朝見真美子教諭の指導のもと、それぞれが試行錯誤しつつも真剣に作業に取り組んだ。授業で登場した素材(ハンカチ、古着等)に着想を得て制作する生徒や、吉本の実演(転写、刺繍)に刺激を受け、それを自作の技法として取り入れる生徒、得意分野のイラストレーションで自分のスタイルを追求する生徒など、吉本から得たものをそれぞれに咀嚼しながらの制作となった。身の周りの物(文房具など)、布製品(ユニフォーム、帯、シューズ)、趣味に因んだもの(けん玉、プラモデルの廃材、ルアー)、自然物(木の葉、枝)など、幅広いものが作品の素材として用いられた。

【プロジェクト第2期：展覧会】

(6) 2015年12月8日(火) 展示作業

美術館専門輸送・展示業者と美術館スタッフ、担当教諭も加わり、展示作業を行った。

(7) 展覧会「吉本直子×姫路市立城乾中学校2年生 95の声 The Form of our Hearts」

参加生徒の作品92点と吉本直子作品2点(《記憶の手触り》2001年、《沈黙のことば》2012年)、実施記録映像(約3分間、制作：梅岡唯歩)を展示した。展覧会の会期中には、堀教頭と担当学芸員の司会進行により、参加生徒数名が自作を語るトークイベントも開催した。11日間の会期中、789人の来場者があった。

3 反響

生徒からは、「たくさんの発見をして、自分の中の「普通」をくつがえすことが多く、とても刺激的な授業でした。」「自分の作品に対する思い・考えが変わりました。真剣に考えて、思いや考え、素材など自分で全て、最初から考えることによって作品と自ら向き合うという大切さを学びました。」などの意見が寄せられ、保護者からは、「美術館と学校の連携事業により美術作家の方と直に触れ合う時間を持つ事が出来た経験は思春期の生徒たちにとっても意義のあるものだったと思います。2ヶ月の準備期間中、自身が今現在、興味のある事、打ち込んでいる事、又、それ故の悩み、苦労、虚無感等・・・見つめ直すきっかけ、また第三者へ心中の発信となる良い機会になったのではないのでしょうか。」「アート(美術・芸術)に向き合い考えた事は、社会人になった時、仕事、生活の中での柔軟な発想ができる力となるように見ていて感じました。」といった意見が寄せられた。

【平成28(2016)年度 学校連携プロジェクト】

1 概要

平成28年度の実施相手校は姫路市立大津小学校、参加生徒は全5年生145人(4クラス)。現在、兵庫県朝来市を拠点に制作活動を行なっているアーティスト・内藤絹子を招いてプロジェクトを実施した。内藤絹子は、大阪府生まれ。京都精華大学美術学部造形学科版画専攻卒業後、1995年同大学大学院美術研究科版画専攻修了。1996年から兵庫県朝来市に移住し、制作と共に畑仕事を始める。2000年「VOCA展2000」奨励賞(上野の森美術館)、2008年「あさご芸術の森大賞展」準大賞受賞(あさご芸術の森美術館)。長岡國人の助手として、国際的な拓本プロジェクトでも活躍している。2012年からは版画工房N組設立メンバーとして活動。国内外で数々の個展やグループ展に出品している。

内藤絹子による授業は、10月4日(火)と14日(金)に行い、その後、それぞれの児童は担任教員のサポートのもと、拓本による自分だけの形を創り出していった。

取り組みの成果を公開する展覧会は、12月13日(火)から25日(日)まで開催。参加児童全員の作品の他、内藤氏の作品、そしてプロジェクトの実施状況を示す映像を展示した。

プロジェクト名称 内藤絹子×姫路市立大津小学校

手で発見!「私の心」浮かび上がる145の気持ちー拓本プロジェクト

アーティスト 内藤絹子(現代美術家)

連携校 姫路市立大津小学校(神園方子校長)

対象児童 全5年生、4クラス145人

指導教員 上山説子教諭、喜谷智行教諭、田中慶子教諭、西山琢教諭

担当学芸員 本丸生野

【プロジェクト第1期：授業】

(1) 2016年10月4日(火) 内藤絹子による授業 「内藤絹子さんと出会う」

- (2) 2016年10月14日（金） 内藤絹子による授業 「やってみよう！拓本」
- (3) 2016年11月 クラス担任の指導・サポートによる制作活動「自分だけの形をつくろう」

【プロジェクト第2期：展覧会】

- (4) 12月10日（土）～12日（月） 展示作業
- (5) 12月13日（火）～25日（日） 学校連携プロジェクト展 内藤絹子×姫路市立大津小学校 手で発見！「私の心」 浮かび上がる145の気持ち - 拓本プロジェクト

2 実施のながれ

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 2016年10月4日（火） 内藤絹子による授業 「内藤絹子さんと出会う」

大津小学校の体育館での学年行事としての取り組みとなった。アーティスト・内藤絹子について、できるだけ実感を伴う出会いを実現するために、内藤の協力を得て、作品や農作物（内藤が育てたもの）や制作ノートに授業現場に持ち込み、子どもたちの能動的な対象把握や問いかけの発露に繋げた。

神園校長、上山教諭による導入の後に、学芸員から簡単な頭出し（プロジェクトについての概要説明とアーティストの紹介）を行い、その後、作家自身によるスライドトークを実施。次に、体育館の中に設けた4つの島 ①内藤絹子の暮らしを知る島、②これまでの作家活動を知る島、③制作実演の島、④作品鑑賞の島をクラス毎（4クラス）に巡りながら、児童はそれぞれに理解を深めていった。この授業には、当館のボランティア（イベント補助班）のスタッフも事前研修を経てプロジェクトに加わり、①②の島に配置。学校と作家を繋ぐメディアーターとして直接児童と触れ合った。③は内藤氏による跳び箱の乾拓の実演、④は美術館学芸員がファシリテーターを務め、対話型鑑賞を行った。

- (2) 2016年10月14日（金） 内藤絹子による授業 「やってみよう！拓本」

2回目・14日は「やってみよう！拓本」として、図工室でのクラス毎の授業となった。内藤絹子による、湿拓の実演（図工室の木製椅子）とレクチャーの後に、体育館での授業で実見した手法・乾拓による試作品づくりを行った。想像と異なる意外な形が浮かび上がる様子に敏感に反応しながらの経験は、初めて出会う「拓本」の技法を、自分自身の表現手段として体得するための貴重な時間となった。

- (3) 2016年11月 クラス担任の指導・サポートによる制作活動「自分だけの形をつくろう」

いよいよ作品づくりの本番に先立ち、各クラスの担当教諭の指導のもと、ワークシートを用いて1、2回目の授業を振り返り、自分だけの拓本作品へと思いめぐらせた。「学校の中で拓本してみたい場所はどこだろう。その理由も書こう。」というワークシートの問いを通して、それぞれの児童が教室、校舎、校庭など、学校のさまざまな場所を改めて見直し考えた。本制作に入る前には、作品制作のルール、内藤絹子と学芸員からのメッセージを明記したプリント「作品制作にあたって」を児童に配布。内藤絹子からのメッセージを担当の先生が代読し、学芸員からのメッセージは学芸員が直に伝えた。その後、担任の先生のサポートのもと、各児童は試行錯誤しながらの制作を開始した。技法は乾拓、湿拓どちらを用いてもよいこととし、コラージュや文字の書き込み等もすべて自由とした。湿拓で用いるタンポも、児童がそれぞれ手作りした。タンポの構造は、スポンジを台所用のラップと布（児童が自宅から持参）で包み、輪ゴムで固定した簡易なもの。内藤の使うものとは構造が異なるが、道具も含めて自作することにより、自ら考え工夫する、能動的な制作への足がかりとした。

拓本は、モノの表面の凹凸を“見える化”する技法。拓本を採る対象物に何を選ぶのか、浮かび上がった形に何を見出すのか？・・・それを考え、形にすることで「拓本」を超えた作品が生まれていった。

【プロジェクト第2期：展覧会】

- (4) 12月10日（土）～12日（月） 展示作業

作業は、美術品専門業者と担当学芸員が、内藤絹子、担当教諭の協力のもと、概ね2日間で行った。立体的な展示空間を実現するために、美術館から演示台を多数輸送し、島状に積み上げた側面を利用して展示し、個々の作品には使用した道具（タンポ）も添えた。児童作品本体の壁面への固定に際し、作品それぞれの裏面に1センチ程度の厚みのスチレンボードを局所的に貼り付け、その部分をピンで固定する方法を採用した。それにより、壁から少し浮いた形で固定され、拓本技法特有の凹凸が存在感を増す効果が出た。また、ちぎったり、めくれたりしている支持体の外形と物質感が意識され、のびのびとした表現の豊かさが際立った。

- (5) 12月13日（火）～25日（日） 学校連携プロジェクト展 内藤絹子×姫路市立大津小学校 手で発見！「私の心」 浮かび上がる145の気持ち - 拓本プロジェクト

児童作品（参加児童全員分）、内藤絹子作品5点（《祈りの言葉一紙の上を這う》2007年、《祈りの言葉一廊下/空》2014年、《祈りの言葉一正座》2009年、《昭和のオマージュ1》2009年、《昭和のオマージュ9》2016年）、そして実施記録映像※1点の出品で、合計150点の展示となった。制作で使用した手作りタンポに制作のプロセスを想像しつつの鑑賞となった。作品はさることながらタンポそれ自体にも個性が感じられ、来場者の目を楽しませていた。作品は、採拓対象に自分の気持ちを投影したものや、拓本による模様を活かしてカラー

ジュすることにより、全く別の物語が表われたものなど、様々な観点・方向性が見られた。内藤氏によるモノクロームの深遠な作品と、児童による多様な色彩世界が好対照を成す空間となった。

会期中には、トークイベントを4回実施（内藤絹子と本丸によるトーク、上山説子教諭と本丸によるトークをそれぞれ2回ずつ）。12日間の会期を通じて、1077人の入場があった。

※実施記録映像：約5分間 撮影：姫路市立美術館・姫路市立大津小学校 編集：株式会社ウィル

3 反響

児童からは、「拓本をしているとき、とても真剣にできた。まるで、自分が違うみたいだった。拓本は、むずかしかつたけど、良かったところもあった。それは、自分が見つけられたこと。」「題名を決めるつもりはなかったけど、拓本して色がつきはじめてからなぜかいつぜん題名が浮かびあがってきた。」、保護者からは、「子どもから「立体的に見せるためにちょっと浮かせてあるんやで」と聞き、教科書の中では学ばないような技術・工夫も学べたのではないかと思います。」、来場者からは、「それぞれの想いが作品は勿論、タイトル、採拓場所の説明に表われ、感心したり笑ったり、使ったタンポが展示されているのもいいですね。それぞれが家から持ってきたハンカチ、雑巾？子供の心の豊かさ無限性をかい間見られました。」「生徒さん達の目のつけどころのすばらしさに感心しました。アートは生活の中のどこにでもあるということに気がきました。」「美の原点の楽しさが溢れている。」「作品を見て、子ども達の笑っている顔が浮かんできました。」などのコメントが寄せられた。

[平成29（2017）年度 学校連携プロジェクト]

1 概要

平成29年度の連携校は、美術館から1.5kmほど北西に位置する兵庫県立姫路西高等学校となった。プロジェクトの参加アーティストで日本デザインセンター最高顧問、永井一正（グラフィックデザイナー）の出身校であり、生徒たちにとって、70余年前に同じ学校に通い、今や世界的に活躍する先輩について学ぶ機会となった。同校は平成27年度より、文部科学省SGH（スーパーグローバルハイスクール）の事業指定校として、グローバル・リーダーの育成に取り組んでいる。参加生徒は知の総合類型の40人。SGHの取り組みに特化した1年7組の40人のメンバーであった。学校設定科目である「国際社会科学」と「国際人文科学」の合同の特別講義として、連携授業が位置づけられた。

プロジェクトの具体的内容は、姫路西高等学校での授業2回と、姫路市立美術館での授業2回を経て進められた。姫路市立美術館での授業は、当時企画展示室で開催中の「永井一正ポスター展」会場を活用し、永井一史（アートディレクター・多摩美術大学教授）、Ayu（音楽家）、軸原ヨウスケ（デザイナー）を招聘して実施した。その過程で、生徒たちは視覚情報からの想起と言語化、言語による共有と考察、言葉・イメージ双方向からの再認識、音声・演奏等による作品世界への没入と感性の鋭敏化、作品と対話しながらの執筆、という作業を通じて、さまざまなインプットとアウトプットを行った。2017年12月9日から24日に開催された展覧会「兵庫県立姫路西高等学校1年7組40人による 永井一正ポスター展」にて、取り組みの成果を公開した。

プロジェクト名の「思考する LIFE」の LIFE は、永井一正が1980年前半より一貫して取り組んできたテーマそのものを示す言葉である。そこに、学習する主体＝エネルギーに“生きる”生徒たちを重ねた。

プロジェクト名称 思考する LIFE 永井一正×姫路西高 SGH40

出品作家 永井一正（グラフィックデザイナー）

参加アーティスト 永井一史（アートディレクター・多摩美術大学教授）、Ayu（音楽家）、
軸原ヨウスケ（デザイナー）

連携校 兵庫県立姫路西高等学校（山根文人校長）

対象生徒 1年7組 全40人

指導教員 磯合幹男教諭、日浦真耶教諭

担当学芸員 本丸生野

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 2017年11月7日（火）13：25～14：20（5限）
担当学芸員による授業「博物館とは、美術館とは、展覧会とは」
- (2) 11月10日（金）10：30～11：25（3限）
磯合幹男教諭による授業「永井一正氏を知る」
- (3) 11月13日（月）13：25～15：25（5.6限）
永井一史によるワークショップ「鑑賞×問い、問い×対話」
- (4) 11月20日（月）13：25～15：25（5.6限）
Ayu、軸原ヨウスケによるパフォーマンスの体験と執筆「つくることば、いきることば」

【プロジェクト第2期：展覧会】

(5) 12月7日（木）、8日（金） 展示作業

(6) 12月9日（水）～24日（日）

学校連携プロジェクト展 兵庫県立姫路西高等学校1年7組40人による 永井一正ポスター展

【プロジェクト第1期：授業】

(1) 2017年11月7日（火）13：25～14：20（5限）

担当学芸員による授業「博物館とは、美術館とは、展覧会とは」

プロジェクトの最初の取り組みは、姫路西高等学校1年7組HR教室での担当学芸員（本丸生野）による授業となった。プロジェクトに参加するにあたって生徒それぞれが把握しておくべき情報を提供し、今後の学習活動の中での理解促進の素地をつくるのが授業の目的である。PPTを用いて、博物館の位置づけや社会的役割、姫路市立美術館の沿革、プロジェクトの概要を解説した。このプロジェクトの特性として、学びの成果が展覧会によって不特定多数に向けて発信されること、展覧会は、来場者に向けた表現手段であることも伝えた。

(2) 11月10日（金）10：30～11：25（3限）

磯合幹男教諭による授業「永井一正氏を知る」

姫路西高等学校1年7組HR教室での授業（国際社会科学）。永井一正より提供されたインタビュービデオを活用し、同氏のグラフィックデザイン創成期からの流れをたどるとともに、旧制姫路中学校、姫路西高校の沿革と永井氏の略歴をまとめた教諭オリジナルの年表を用いて理解を深めた。この授業を通じて、永井一正という一人のグラフィックデザイナーと生徒それぞれの、時を越えたつながりを認識するとともに、美術館・学校連携プロジェクトの今後の取り組みを通して考察してゆくべきことについての見通しを得た。

(3) 11月13日（月）13：25～15：25（5.6限）

永井一史氏によるワークショップ「鑑賞×問い、問い×対話」

姫路市立美術館（企画展示室・2階講堂）での、アートディレクター・多摩美術大学教授の永井一史によるワークショップ。作品鑑賞を通じて各自疑問点を抽出・共有し、ディスカッションを通じてそれぞれの思いを深めた。担当する作品の選定も行った。なお、この授業には、アシスタントとして、永井玲衣※も加わった。

13：25 講堂集合・講師紹介

13：35～ 「永井一正ポスター展」を鑑賞し、生徒それぞれの内面に芽生えた「問い」（渾身の“？”）を付箋に記入

13：45～ グループワーク：展示室でそれぞれが記入してきた「問い」「？」を班（5人ずつの8班）ごとに共有し、模造紙に貼り付け、構造化し（似たテーマごとにまとめてタイトルをつけ、問いマップを作成）、発表。

13：55～ 奇数班・偶数班の2グループに分かれ、それぞれのグループに永井一史、永井玲衣がファシリテーターとして入り、ディスカッション。

14：05～14：20 永井一史との作品鑑賞と作品選定：永井一史とともに、永井一正ポスター展の会場を改めてめぐり、表現の変遷をたどった。初期の幾何学的なグラフィック、姫路シロトピア博ポスターの頃のモチーフの転換、そしてLIFEシリーズの幕開けから現在まで、永井一史の解説を聞きながら会場を巡った。その後、学校連携プロジェクト展への出品候補作品一覧を用いて各自で担当したい作品を選定した（各自5点程度で優先順位を明記、次回授業までに担当作品決定）。下校までに、ふりかえりシートを提出。

上記流れの中で、「問い」の抽出の後、作品の空間を離れ、別会場（美術館2階講堂）で議論を深めたが、作品の視覚情報と遮断された環境で議論されることにより、作品から受けた印象が自己の内的世界で咀嚼され、異化され、新たな段階の解釈へと深化していく道が拓かれた。さらにその後、改めて展示室を訪れ、永井一史氏のトークとともに作品と対峙した生徒たちは、また新鮮な視点をもって作品を受容し、自己の内部を照らしていった。

※永井玲衣：上智大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程、立教大学文学部研究補助員（当時）。永井一史は父。

(4) 11月20日（月）13：25～15：25（5.6限）

Ayuo、軸原ヨウスケによるパフォーマンスの体験と執筆「つくることば、いきることば」

《LIFE》シリーズが展示された空間（姫路市立美術館企画展示室）で、音楽家 Ayuo とデザイナー軸原ヨウスケによるパフォーマンス「つくることば、いきることば」（永井一正著作朗読×ライブ×ギャラリートーク）を体験し、永井一正の作品世界をより深く鑑賞した後、担当作品とじっくり向き合いながら言葉を綴った。Ayuo と軸原のパフォーマンスは、永井一正の著書『つくることば いきることば』から言葉を抜粋し、Ayuo オリジナル音楽を組み合わせたものであった。Ayuo は主に英語で詩を書き、曲を作るアーティストである。永井一正のことが熱を帯びた口調で語られ、自身の曲が演奏される。それは、永井一正《LIFE》が全面に展示された大壁面をバックに繰り返されることにより、複数のアーティストによる世界観の提示と

いう枠を超えた、何か普遍性を帯びたメッセージに変換され会場に充満した。パフォーマンスの中で語られた言葉には、永井作品の主題や方法への理解に繋がるヒントとなるものや、その作品の母体となる永井一正自身の人生に触れるものもあった。

13：20 講堂集合・取り組みの流れの説明

13：35～ 展示室内での体験型鑑賞

14：00～ 質疑応答（生徒からアーティストへ質問）

14：10～ 作品と対話し、ことばをつむぐ：自身が選んだポスター1点（学校連携プロジェクト展にて展示するもの）に対峙し、展覧会にて公開するパネルの原稿を作成。

執筆する上で、生徒に周知したこと

・いわゆる「解説」ではない、自分にしか書けない文章にしましょう。・文体は自由です。改行、空白など、こだわりたいことがあれば欄外に明記してください。・文字は400文字程度（600字以内）。

作成にあたっては、以下の点に留意してください。

・既成の解説文等の引用はしないでください。・基本的に全文独自の文章として、筆者が文責を負うものとします。・文章は記名で展覧会場に展示されます。・自分の考え・感想と客観的な事実を明確に区別して表してください。事実は裏付けをもって正確に記してください。

15：20～ 美術館2階講堂にてまとめ（生徒代表による挨拶とアーティストから生徒へのメッセージ）

【プロジェクト第2期：展覧会】

(5) 12月7日（木）、8日（金） 展示作業

美術品専門輸送・展示業者と美術館スタッフで展示作業を行った。

(6) 12月9日（水）～24日（日）

学校連携プロジェクト展 兵庫県立姫路西高等学校1年7組40人による 永井一正ポスター展

企画展「永井一正ポスター展」の会期の後半に重ねて展覧会を実施することにより、2つの永井一正ポスター展の同日観覧も可能とした。姫路市民ギャラリーは美術館から姫路駅方面に徒歩約10分の位置にある。ねらい通り、企画展の入場者の多くが、「思考する LIFE」にも足を運ばれていたようである。

展示作品は、永井一正ポスター40点。それぞれの作品に、参加生徒が執筆した言葉をパネル化し、1対1で提示した。来場者がじっくりと生徒の文章に向き合えるよう、壁に固定したパネルとは別に、手に取って読める冊子型ファイルも設置。

その他、閲覧用資料として、11月13日（月）の取り組みの中で生徒が記入した「問い」の現物（付箋）も冊子型ファイルにて公開した。

さらに、実施記録映像※をプロジェクターで壁面に投影した。プロジェクトの流れのみならず、生徒の学びの姿勢や表情、現場の空気感までも具体的に伝える重要なツールとなった。

14日間の会期中を通して793人の来場者があり、100人以上からアンケートの回答が寄せられた。

※実施記録映像：《高等学校連携プロジェクト「思考する LIFE 永井一正×姫路西高 SGH40」記録映像》約13分間
映像制作・撮影 株式会社ウィル 竹内孝太郎・村松侑奈

3 反響

生徒からは「新しいことをたくさん学ぶというよりは、自分の考えが変わる、また元のものにプラスされる、という学習でした。」「周りに認められなくても、結果が返ってこなくても、自分が後悔せず全力を尽くしたと言えるならばそれで良いのかもしれない。自分はやり切ったという充足感こそが尊いのもかもしれない、そう考えた。」「自分の内側と向き合って命のことや生きることについて深く考えることができました。」、来場者からは、「高校生が真正面から向き合っている解説（感想）は読み応えがありました。」「同じ画風（シリーズ）でも1点ごとに個人の視点が如実に言葉にされていて、多くの考察を得ることができました。」「高校生の文章力におどろかされました。みずみずしい表現で言葉がつづられていて新鮮です。若さに嫉妬を覚えました。」などの意見が寄せられた。

【平成30（2018）年度 学校連携プロジェクト】

1 概要

平成30年度、11校目の取り組みは、姫路市立白鷺小中学校とプロジェクトを展開した。姫路市立白鷺小中学校は、美術館から800mほど南西に位置している。「姫路市立白鷺小学校」と「姫路市立白鷺中学校」が1つになり平成30年4月1日に開校した、姫路市における義務教育学校の第一号である。招聘作家は、改修のため休館中（平成30年8月1日より平成31年2月25日）の姫路市立美術館の庭園を活用したアートプロジェクト（企画展）「松井紫朗のセンス・オブ・ワンダー」を展開中の松井紫朗（美術家・京都市立芸術大学教授）である。松井は奈良県天理市生まれ。人間の知覚や空間認識に揺さぶりをかける作品で知られる作家である。この企画展（庭園プロ

プロジェクト）は、既成の枠組みを超える表現を通して世に問い続ける作家、松井紫朗によって、姫路市立美術館という場を捉え直そうとする試みであった。平成30年度の学校連携プロジェクトは、この庭園プロジェクトとリンクさせながらの開催となった。題して「センス・オブ・ワンダー ～未来の私たちへのメッセージ～」。参加生徒は2年生（111人）と8年生（88人）、小中一貫校ならではの、学年を超えた取り組みとなった。企画展「松井紫朗のセンス・オブ・ワンダー」での鑑賞体験にはじまり、館蔵品を用いた授業、行為としてのアート体験《手に取る宇宙—Message in a Bottle》と続き、2019年12月11日から23日に開催の「2018年度 姫路市立美術館 学校連携プロジェクト展 センス・オブ・ワンダー ～未来の私たちへのメッセージ～」展にて、その成果を公開する内容となった。

プロジェクト名称 センス・オブ・ワンダー ～未来の私たちへのメッセージ～
美術家松井紫朗×姫路市立白鷺小中学校

参加アーティスト 松井紫朗（美術家）

連携校 姫路市立白鷺小中学校（山口偉一校長）

対象生徒 全2年生111名、全8年生88人

指導教員 青田美智江主幹教諭

担当学芸員 本丸生野

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 2018年9月26日（水）2～4校時「センス・オブ・ワンダーの庭」鑑賞体験（2、8年生）
- (2) 10月18日（木）2～4校時 松井紫朗による授業「作品のリアル～モノとコトをめぐって」（8年生）
- (3) 10月18日（木）13：40～15：30（5、6校時）松井紫朗《手に取る宇宙 地上ミッション 日本 姫路市立白鷺小中学校》体験（8年生）
- (4) 10月下旬～11月頃 青田美智江主幹教諭の指導による作品制作（8年生）

【プロジェクト第2期：展覧会】

- (5) 12月9日～10日 展示作業
- (6) 12月11日（火）～23日（日）
姫路市立美術館 学校連携プロジェクト展 センス・オブ・ワンダー～未来の私たちへのメッセージ～
美術家松井紫朗×姫路市立白鷺小中学校
- (7) 12月20日（水）2～4校時 「活動の振り返り」

2 実施のながれ

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 2018年9月26日（水）2～4校時「センス・オブ・ワンダーの庭」鑑賞体験（2、8年生）
大規模なインスタレーションを、体験的に鑑賞する授業。姫路市立美術館の庭園に展開されている松井紫朗作品《センス・オブ・ワンダーの庭》に白鷺小中学校の2年生と8年生が手をつないで訪れ、体験した。2年生4クラスと8年生3クラスを3グループに分け、2、4時間目（2年生の授業時間に合わせ各45分間）を利用して実施した。2年生のつぶやきが8年生の感覚を開いたり、8年生の投げかけが2年生の興味を深めたりと、小中一貫校ならではの学びがあった。アーティストの本領が発揮されたサイト・スペシフィックな作品《センス・オブ・ワンダーの庭》を体験した2年生は、現場で受けた印象を、後日、絵や文字で表した。そこからは、作家のインスタレーションに直接向き合い、触発される体験を通して、映像や写真では伝わらない作品のスケールや感触を存分に楽しんでいたことが伺えた。
- (2) 10月18日（木）2～4校時 松井紫朗による授業「作品のリアル～モノとコトをめぐって」（8年生・各クラス1校時）

まず、イーグレひめじの特別展示室で開催の姫路市立美術館所蔵作品展「日本画の世界」の作品を担当学芸員（安部すみれ）の解説とともに鑑賞。描かれた対象について具体的な情報提供（解説）を行うのは数点に留め、生徒への問いかけや自由に鑑賞する時間も確保した。その後、別室に移動し、当館所蔵の福田眉仙の卷子（支那三十図巻より《長城画卷》）や自身の所蔵茶碗などを生徒の目の前で掲げながら松井紫朗が語り、共に作品を味わった。

1点の作品でも、ズームインで見えるもの、ズームアウトで見えるものが異なることや、鑑賞を通して、作品そのもの（についての概念）が個人の中で変貌・成長してゆくことなどが松井氏の口から語られた。

- (3) 10月18日（木）13：40～15：30（5、6校時）松井紫朗《手に取る宇宙 地上ミッション 日本 姫路市立白鷺小中学校》体験（8年生）

松井紫朗が2014年から取り組んでいる《手に取る宇宙—Message in a Bottle 地上ミッション》。これは宇

宙飛行士のミッションを経て地上にもたらされた“宇宙”を実際に手に取る、行為としてのアートである。この地上ミッションを、学校連携プロジェクトの一環として姫路市白鷺小中学校体育館で実施した。前日17日の夕刻に、松井紫朗、美術部員を中心とする生徒有志、姫路市内の教員有志らの協力のもとオリジナルの特設ドームを体育館内に設置。当日は、5、6時間目を繋げたトータル110分程度での実施となった。

13：40～14：05 松井紫朗によるトーク

- ・自身のこれまでの作品について（作品を制作する上での着眼点など）
- ・NASA、JAXA との連携による国際宇宙ステーションの宇宙飛行士による宇宙の採取について（映像、ボトルのしくみ等）
- ・地上ミッションの概要

14：05～15：20 ローテーションにより、地上ミッションを実施

グループごとにドームに入る→一人ずつテーブルにつき、松井紫朗よりボトルに入った宇宙を受け、手に取る→ドームから出る→思い浮かんだことをシートに記入する→シートをスキャン（データ蓄積）するとともに、ハッブル望遠鏡の星空（プロジェクション）にシートの画像を飛ばす→シートを紙のボトルに封印上記の流れを核に、映像鑑賞を取り入れ、ローテーション。

15：20～15：30 松井によるコメント、質疑応答と終了挨拶

(4) 10月下旬～11月頃 青田美智江主幹教諭の指導による作品制作（8年生）

美術館との連携の軌跡を学校の授業につなげる取り組みは、学校連携プロジェクトの醍醐味とも言える。白鷺小中学校では、青田教諭の8年生の美術の授業の中で、①ウェビングによる思考、②ボトルを置く場所としての作品計画、③制作、の流れで取り組みを行った。

この過程で、手元に残された紙のボトル（＝宇宙を手にとったときの体験が封印されたタイムカプセル）に改めて向き合い、それを開封する時はどんな時か、など、未来の自分を想像しながら表現していった。表現の主体は、カラーペーパーである。学校で100色を超えるカラーペーパーを制作材料として準備し、それらの中から生徒が自由に選択してカラーージュすることで表現した。絵の具を混色する作業が不要な上、自分のイメージに合った色をダイレクトに選定できる特性を持った素材（カラーペーパー）を教材として使用することで、限られた時間で一定の表現を達成できたようだ。

最終的にオリジナルの材料も持ち込んだ生徒も多く、タイトルとあいまって魅力的な作品が完成した。

【プロジェクト第2期：展覧会】

(5) 12月9日～10日 展示作業

松井紫朗、美術品専門輸送・展示業者と美術館スタッフで展示作業を行った。

(6) 12月11日（火）～23日（日）

姫路市立美術館 学校連携プロジェクト展 センス・オブ・ワンダー～未来の私たちへのメッセージ～
美術家松井紫朗×姫路市立白鷺小中学校

美術館・学校連携プロジェクト展の成果を公開する展覧会。《センス・オブ・ワンダーの庭》の展示物の一部、9月26日の「センス・オブ・ワンダーの庭」鑑賞体験（2、8年生）の2年生の表現（ずこうノート）、8年生の作品、実施状況を示す映像などを展示した（詳細下記）。会期中には、688人の方が訪れた。

展示物

〔松井紫朗作品〕

- ・《Inside Outside》（《センス・オブ・ワンダーの庭》構成パーツ）2018年、リップストップ

〔成果物〕

- ・2年生の表現（ずこうノート）109点
- ・8年生の表現 84点

〔映像〕

- ・《姫路市立美術館 学校連携プロジェクト 美術家 松井紫朗×姫路市立白鷺小中学校 記録映像》約8分間、映像制作：株式会社ウィル 竹内孝太郎

〔資料〕

- ・8年生のメッセージが封印されたボトル（全員分）
- ・手に取る宇宙－Message in a Bottle 地上ミッション HP のスライドショー
- ・Space Bottle I（宇宙採取用容器）
- ・NASA 宇宙飛行士による国際宇宙ステーションの軌道上での宇宙採取ミッションの記録映像
- ・映像作品《宇宙はラの音で鳴っている》動画・音楽・脚本：外山光男 / 監修：松井紫朗、NPO 法人 CAPSS
- ・姫路市立白鷺小中学校8年美術授業風景の記録映像（指導者：青田美智江主幹教諭）

(7) 12月20日（水）2～4校時 「活動の振り返り」

プロジェクト第一期、9月26日の鑑賞体験と同様に、2年生と8年生が3グループに分かれ、ともに展覧会場を訪れ鑑賞するとともに、プロジェクトの振り返りを行った。

まず、会場を訪れた児童・生徒は、永田萌館長と対面。展示された成果物を、多くの方が感心して鑑賞していることが館長の口から語られた。その後、展示室壁面に投影している記録映像を前に、活動を振り返っていった。客観的視点から記録され、編集された映像を見る際に、8年生の視点は、取り組みの主体から、客体としての視点に自動転換され、このプロジェクトの全体像を捉えなおすきっかけになったと思われる。また、2年生にとっては8年生が体験した“未知の行為”に対する好奇心が、8年生とのコミュニケーションの深まりに繋がったようだ。

3 反響

参加生徒からは、「なんでだろう」と疑問がたくさん浮かび、不思議な時間であった。次は自分の可能性を見つけて考えていきたいと思った。「美術館という場所に行くことで、同じものが違う見え方で感じる事ができた。」「美術に決まった「答」はないことを改めて感じた。一人も同じではなく一つのことにくつもの「答」が出るのがすごいと思う。」「(展示の中で)宇宙を手にとった時に想いを詰めたボトルがたくさん重なっていて、なぜか宇宙を想像できた。」「自分と向き合ってみて、たくさんの発見がありいろいろなことを感じる事ができた。いつかこの日のことを思い出した自分が、ボトルを開けて、もう一度自分と向き合ってくれたらと思った。」「(展示を見て)どこまでも、松井紫朗氏の作品が繋がっていると感じた。あの時の空気がボトルの中に残っていて、その空気を入れた日のことが映像で流れていて、歴史博物館のように感じた。」などの意見が寄せられた。

【令和1（2019）年度 学校連携プロジェクト】

1 概要

令和1年度の美術館・学校連携事業の舞台は姫路市立^{あぞの}蒔野小学校。全校生32人の小規模校である。この小規模校の全児童が、美術館の橋渡しによりアーティストと出会い、直に触れ合い、ともに制作する、学年融合型の取り組みとなった。アーティストは、姫路市出身の版画家・高浜利也（武蔵野美術大学教授）。高浜は、国内外のワークショップやアーティストインレジデンスを経て、作品の主題を建築や都市・社会へと広げてきた作家である。2006年から展開しているアートプロジェクト《Community on the move（旅するまちなみ）》はそれを象徴するものとなっている。全国15箇所以上で実施されてきたこのアートプロジェクトは、作家がその土地を象徴する“床”をつくり、そこを基点に、その土地のさまざまな人が思い思いに「積み木」（作家が切って作った木片）で造形物をつくり配置していくというもの。「積み木」は、これまでのプロジェクトで継承されてきたものに、実施の地域ゆかりの廃材が加えられるため、さまざまな場所や時間、参加者の痕跡が蓄積された唯一無二のまちなみになる。そのような活動を経て可視化された風景やエピソードを銅版画に異質して発表する、それが版画家・高浜利也の作家活動のすがたである。

連携プロジェクトを通して、高浜利也という版画家の「行為」と「表現」の循環を児童自身が追体験できるよう設定した。それにより、アーティストの表現活動の根本にある思考や思いに触れられると考えたからである。具体的には、担当の川島教諭による高浜作品へのアプローチの授業に始まり、高浜利也によるワークショップ（行為～表現）を経て、地域や来場者を取り込みながらの展覧会の実施となった。

プロジェクト名称 高浜利也－Community on the move @Azono 姫路市立蒔野小学校×姫路市立美術館

アーティスト 高浜利也（版画家・武蔵野美術大学教授）

連携校 姫路市立蒔野小学校（原田裕文校長）

対象生徒 全校生徒1～6年生32人

指導教員 川島邦夫教諭

担当学芸員 本丸生野

【プロジェクト第1期：授業】

(1) 2019年10月8日（火）午後 対話型鑑賞「絵の中のモノとコト～高浜利也作品にせまる」

(2) 10月11日（金）午前～ 高浜利也ワークショップ

「Community on the move ～みんなで積み木のまちなみをつくろう」

(3) 11月15日（金）午前 高浜利也ワークショップ

「こころの風景～べりべりはんがをつくろう」

ワークショップアシスタント

平井剛（武蔵野美術大学講師、版画工房 エディションワークス プリンター）

チョン ダウン（武蔵野美術大学大学院）、古賀慧道（武蔵野美術大学大学院）

【プロジェクト第2期：展覧会】

- (4) 12月5日(木) 午前 《Community on the move @Azono》の再構成
- (5) 12月7日(土)～22日(日) 学校連携プロジェクト展
高浜利也 - Community on the move @Azono

2 実施のながれ

【プロジェクト第1期：授業】

- (1) 10月8日(火) 午後

対話型鑑賞「絵の中のモノとコト～高浜利也作品にせまる」

まず、プロジェクトのプロローグとして、令和1年10月8日に、蒔野小学校での川島邦夫教諭による対話型の鑑賞授業が行われた。1～3年生と4～6年生で個別に時間を設け、姫路市立美術館所蔵の高浜利也作品の画像をモニターに映し、じっくりと観察。「何が見える?」という声かけに、「地球が闇につつまれている」「いろいろなことが、隠れている」など、気づいたり感じたりしたことが様々に語られ、共有されていった。読み取ったイメージを言語化し、作品に込められた思いを想像する活動は、他者理解の素地形成や制作意欲の芽生えに繋がったようである。

- (2) 10月11日(金) 午前～

高浜利也ワークショップ「Community on the move ～みんなで積み木のまちなみをつくろう」

実施前日に高浜利也が蒔野小学校を訪れ、図工室に“床”と大量の“積み木”をつくった。“床”は、蒔野小学校に古くからあるステージの部材に、美術館の展覧会で使用した展示パネルを組み合わせて制作。いよいよ10月11日、図工室に集合し、高浜利也と初めて対面した全児童32人は、蒔野小学校や美術館の他、様々なルーツを持つ「積み木」を自由に組み合わせ、着色し、配置していった。共同でオリジナルの城「ゆめみ城」を創る児童や、これまでの《Community on the move》で知らぬだれかが作った造形物に新たな「積み木」を付け足して制作する児童など、自由な発想で大小さまざまな造形物が配置されていった。その後、約1か月間、担当教諭の見守りのもと、休み時間等に自由に制作が進められ、子どもたちの想いが詰まったまちなみが形成された。

- (3) 11月15日(金) 午前 高浜利也ワークショップ「こころの風景～ぺりぺりはながをつくろう」

高浜利也による2回目の取り組みは、メディウム剥がし刷り*²による版画制作である。3人のアシスタントの協力のもと、体育館で実施した。会場には、高浜利也による版画作品3点(過去のCommunity on the moveを経て生まれた版画作品などをあらかじめ展示し、授業の始めに作者自身が作品について語った。これにより、まちなみをつくる行為(や記憶、それによって作られた形)を版画作品に転換するという、高浜自身の作家活動が具体的に示された。その後、児童は広い作業テーブルを囲み、高浜利也の説明のもとアシスタントのチョンダウンがデモンストレーションを実施した。初めて見る技法に、児童は「すごい!すごい!」と歓声を上げながら注目。制作への動機づけとしても効果的であった。その後、児童はそれぞれ、まちなみをつくった経験を反芻しながら制作に入り、版に積み木のまちなみ(自分たちでつくった風景)を描き起こし、アシスタントらのサポートのもと、次々に紙に刷り取っていった。子どもたちの感性と透明なメディウムを通じた独特の色彩が出会い、豊かな表情の作品が生まれた。

【プロジェクト第2期：展覧会】

- (4) 12月5日(木) 午前 《Community on the move @Azono》の再構成

蒔野小学校図工室で展開した積み木のまちなみ《Community on the move @Azono》と版画作品《こころの風景》は梱包され、展覧会に先立ち、市民ギャラリーへ移動。積み木のまちなみの“床”は、高浜利也によって展示室の空間に最適化された。会場にやってきた児童は、まず高浜利也と共にプロジェクトの記録映像を鑑賞し、これまでの制作活動を振り返った。その後、展示室内に自由に積み木の造形物を配置。一旦すべての造形物を配置した後、高浜利也により、ここが展示室であり、バリアフリーの観点から積み木の配置を再検討すべきことを伝えた。児童はそれぞれ考えながら、配置の調整を行い、《Community on the move @Azono》の再構成は完了。蒔野小学校図工室とは異なるサイトスペシフィックなインスタレーションが出現した。積み木の山や画材も移動し、今度は来場者も自由に参加できる、開かれたまちなみになった。

- (5) 12月7日(土)～22日(日) 学校連携プロジェクト展

高浜利也 - Community on the move @Azono 旅するまちなみと蒔野小学校の子どもたち

展示室には、蒔野小学校図工室から移動されたまちなみ《Community on the move @Azono》(高浜利也と蒔野小学校児童によって、新たにレイアウトされたもの)と共に、児童による32点の版画作品《こころの風景》、高浜利也版画作品(右写真の壁面に展示の3点)、取り組みの記録映像を展示した。

《Community on the move @Azono》=蒔野小学校の図工室から移動してきた積み木のまちなみには、多くの来場者が作り手として参加。会期中、来場者の参画の軌跡を表出しながら、密度を増していった。14日間の

入場者数は832人であった。

3 反響

来場者からは、「作品を見て、心が洗われるような気がしました。ビデオで、子どもたちの笑顔と意欲があふれているのに感動しました。」「子ども達のまちのイメージと理想のイメージ、空想のイメージがまじりあっているようでとても素敵に感じました。自由な表現の機会をつくられていて大人としてうれしく思いました。」「子どもたちの思いが、豊かに表現されているなど思いました(版画)。まちがってはいけないうって描くのではなく、のびのびとした作品に心温まりました。木のまちづくりのダイナミックさ。創っている姿が目に見えかかってくるようでした。木のまちも生きていますね。魅せられました。」「中1の息子と2時間もいました。また来ます。」「ペリペリ版画は独特。色合い、質感で子供の作品ながら大人顔負けのレベルになっている。」「小規模校の特色を生かして全校で取り組んでおられ、一体感が感じられた。」などの意見が寄せられた。

〔まとめ〕

美術館が学校と連携する形は様々あるが、実施する上で重要視するポイントは、美術館としての特性を生かす点にあると言えよう。それは、例えばアーティストとのパイプを有すること、プロの作家の生の作品を扱う機関であること、コレクションを有し、それらについての調査研究が蓄積されていること、さらに展覧会の実施機関であることなどである。

改めて振り返ると、美術館・学校連携プロジェクトの最大のエッセンスは、「つながり」だった。

最終回となった筋野小学校との取り組みを例にとると、次のとおりだ。積み木のまちづくりで、さまざまなルートをもつ古い木片を手にとって工作し、配置する行為は、児童にとって、過去や空間と自分が「つながる」、物質的・触覚的な行為であった。また、版画制作は、アーティストの前から横から後ろから、息遣いや動きの抑揚を無意識に感じとりながらの共同作業で、生の人間同士の「つながり」であった。そして、それらの成果物は、展覧会で公開されることでメッセージ性と公共性が付加され、社会と「つなが」った。当プロジェクトのアンケートからは、これらアクチュアルな「つながり」（成果物としての「作品」や共同作業の様子）への好意的意見が目立ち、その点に実施意義を見出せた。

コロナ禍のいま、この、生の「つながり」をいかにテクノロジーで補えるかが問われ、リモート教育の方法論が様々に構築されている。デジタルアートも含めた作品そのものと対峙する場所としての機能を追求してきた美術館にとって、アクチュアルな「つながり」の価値を改めて表明する必要性を感じている。

奇しくもコロナ禍の到来と時期を同じくして、美術館・学校連携プロジェクトは11年間の幕を下ろした。時代とともに変えるべきこと、変えないことで守るべきこと。さまざまな観点があるが、12校との連携の中で美術館が経験的に深めた「つながりの価値・可能性」への認識は、今後の活動における価値基準の礎として存続していくことだろう。

- * 1 姫路市立美術館・学校連携プロジェクトについては、過去2回研究紀要に掲載している。当館研究紀要第10号（2009年度発行）には、「美術館と高等学校による共同指導の実践報告—高校生学芸員による展覧会「はくらの視点×あなたの出会い」を終えて—」に平成21年度の取り組み内容を掲載している。また、同12号（2011年度発行）には、「第3回高校生学芸員展を終えて」に平成23年度の取り組み内容をまとめている。
- * 2 多摩美術大学の小作青史名誉教授考案の画期的な版画技法。「ペリペリはんが」は高浜利也の研究室（武蔵野美術大学版画研究室）の学生による呼称。クラフトテープや水性メディウムを用いることにより、腐食液やプレス機を使わずにエッチング（凹版）のような線や、多色刷りの表現ができる。

姫路市立美術館 研究紀要 第19号

令和3(2021)年3月 初版発行

令和3(2021)年10月 改訂版発行

発 行 姫路市立美術館
兵庫県姫路市本町68-25
tel.079-222-2288

印 刷 所 小野高速印刷株式会社
姫路市平野町62